
それすらもただ平穩なる日々

羽沢 将吾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それすらもただ平穏なる日々

【Nコード】

N7165C

【作者名】

羽沢 将吾

【あらすじ】

一人暮らしの高校生、ショウ。男一匹、逆境に負けずに頑張つてます！そこに絡むは幼馴染の美少女優等生、遥。凸凹な二人、青春真っ只中！

懸想文？

ジリリリリリリ……

目覚ましが鳴っている。うぜえ。

昨夜寝たのは三時半、バイトの交代要員が休んだから俺が残業した為だ。

新聞配達が休みだったのが救いだぜ。

「ふうわあああああ…」

大あくびをしながら体を起こす。

やべえ、頭痛えな。

「シヨウ！起きなさいよ！！」

ドンドンドン！

遥^{はるか}のヤツか……

普通はノックしてから声掛けるモンじゃないのか？

「バカシヨウ！遅刻するわよ！！」

「解ったつて。先に行つてろよ」

「いいから開けなさい！開けないとドア開けるわよ！」

意味不明だこのバカ女。

ガチャ！

何い！カギ開いたあ！？

「何よこれ！汚ったないなあ！先月掃除したばかりなのに！」

「何でお前が俺の部屋の合鍵持つてんだ！？」

「先月掃除したげた時に作つたのっ！」

「おい、それ犯罪だぞお前」

「良いから！早く顔洗ってこれ食べなさいよね！」

可愛いハンカチに、大きなおにぎりが三つ。

「…サンキュ」

「早くしなさいよ！」

「って、よく見たらまだ六時半じゃんか！」

そついや目覚まし鳴って直ぐ起きたんだからまだ時間的には余裕の筈だぞおい！」

「あたしが部活に間に合わないじゃない！」

遙は弓道部だ。コイツの袴姿は忌々しいが素敵に凛々しい。

くつきりした目鼻立ちにサラッとしたロングヘア、均整の取れたプロポーション。

テストでは学年十位から外れた事無く、先生方からの覚えも目出度い。

男女問わず学校中から注目の的で、特に下級生女子からの人気が高い。

まあ俗に言う完全無欠の美少女ってやつだ。

俺に対して以外は、な。

「ほら！さつさと漕ぐ！」

俺の自転車の後ろできやあきやあ騒ぐ遙。

正直、鬱陶しい事この上ない。

俺達の通うとある地方都市の高校は約二十キロほど離れている。

普通の生徒は近場の駅から電車に乗るのだが、俺は節約の為に自転車で通っている。

まあたまに寝坊したときなんかは原付で学校の近くまで行く事もあるけどな。

しかし先月、珍しくとんでも無い風邪ひき込んで一週間学校休んで以来、

幼馴染の遙が毎朝起こしに来るようになった。

遙の家と俺の家は元々お袋同士が親友で、親父達も仲良くなり、俺達の住んでいた家の近くに持ち家を建てた遙達が引っ越してきた。兄妹の様に幼い頃から遊んでた俺達も今は高校生。早いもんだ。昨年の夏、悪友連とツーリングに出る俺を残して長野へ旅行に行った俺以外の家族が

居眠り運転のトラックに突っ込まれてで全滅しちゃった事だけが変化点か。

住んでた家は借家だったから、俺一人じゃ勿体無いんで六畳と四畳半に

バストイレキッチンの現在^{いま}の部屋に越した。

六畳は前の家からの荷物で一杯になってる、が。

ようやく学校の近くの駅前だ。遙はここで降りて、彼氏の到着を待つ。

アホ臭いったりやありやしねえ。

「ねえ、今夜ご飯食べに来れるの？」

「いや、今夜はガスタのバイトが有るから。」

おばさんによろしく言つといてくれ」

「ちゃんと何か食べなさいよ！」

俺はようやく静かになった事にほっとして学校へ向かう。

……まだHR^{ホームルーム}まで一時間有るよ。

とりあえず教室で寝るか。

自転車を停めて校舎へ入る。

「よう、早いな」

野球部の深見^{ふかみ}が声掛けてくる。

「おう、おはよ。朝練か？」

「ああ、お前は帰宅部なのに早いないつも」

「ムダだよな我ながら」

思わず苦笑する俺。

「お前もなんかやれば良いのに。つっても、二年の夏からじゃな」
「ま、俺は食い扶持稼ぐのに精一杯さ」

「……そうだな、頑張れよ」「ああ。サンキュ」
「いいヤツだよな、アイツ。」

ガラと戸を開けて教室に入る。

「うーす」「おはよー」

声を掛けてくるヤツらに適当に返しながら窓際一番裏手の俺の席に着く。

と、和泉がなんか声掛けてきた。

「ねえ、シヨウくんってさあ、本当に遥と付き合ってないの？」

またそれかよ。

「俺は完全無欠にフリーだし、遥は彼氏居るじゃんか」

「でも、なんかいつも一緒だし」

「だーからー、俺のお袋とアイツのお袋が親友だったヨシミで俺が世話になってんの」

「ふーん、そうなんだ」

「ああ、そうなんです」

ととと、と去って行く和泉。

多分アイツは遥の彼氏の三年B組剣道部主将の芳野さんに片思いしてんだろうな。

んで、俺と遥がいつも一緒に居るのをネタにしてなんとかしようと考えてるんじゃないのか？

しかし今時貴重なあの和風カップルの牙城を崩すのは大変だぞ和泉よ。

って、なんか俺の思考回路が汚れて来てる気がするわ……
とりあえず寝るか。

……………。

うおお、もう昼か。

授業は何受けたっけな？ま、気にしない気にしない。

さて、パン買いに行くべ。

「シヨウ！居る？」

ん？誰かと思えば遙だよ。

「ほらこれ。」

お、弁当。

「なあ遙、おばさんに悪いから良いって言っといてくれよ」

「なに遠慮してんのよ。それにそれはあたしのだからね！」

「あ、そりゃ失礼。って、お前はどうすんだよ？」

「私は芳野先輩と学食で食べるの」

「じゃあ、金払うよ」

「バカねえ。それじゃ節約の意味ないでしょ。良いから食べなさいよ」

「ああ、じゃあありがたく頂くわ。サンキュ」

って、もう居ねえや。

つと放課後か。バイトは七時からだから帰ってちよつと休めるな。
とつと帰るかな。

下駄箱から靴出して、と。

ん？なんだ？なんか落ちてきたぞ。

ってなんだこの手紙は？

「なになに、愛しのシヨウ様へ、って、ラブレターじゃんこれ！！」

「をいつ！なんで遙がここに居て俺の下駄箱からヒラつと落ちた手紙を」

俺より先に拾ってタイトル音読してんだよっ！？」

「誰に状況説明してんのよ。って、マジこれ！？早く開けなさいよバカシヨウ！！」

「だあっ！！なんでお前の前で読まなにならんのだ！とつとと部

活行け！」

「なによ、照れちゃって。シヨウに惚れるなんてドコの物好きかしらあ？」

「あ、芳野先輩」

「え！どこどこ！？」

「ダッシユ！」

「ねえどこ？三年は今日進路相談って、バカシヨウ逃げたわねえっ！！」

遙の喚き声が遠くなる。俺は自転車置き場まで辿り着いてから封を開けた。

「愛しのシヨウ様へ

いきなりこんな手紙を出してごめんなさい。

私は一年A組のの西村 亜里沙と申します……」

西村亜里沙、か……ん、誰だっしょ？

俺の記憶には無いなあ……？しかし、これまた古風なラブレターだね。明日の放課後、美術部室でお待ちしてます、ねえ？

……誰かの仕込みか？

それとも生意気な俺を三年がける積りか？

いや、もうこの時期にそれは無いな。内申が気になるシーズンだからな。

悩んでも仕方ないな、何はともあれ明日の放課後、現場で判断だ。

逆切れ？

とりあえず家に帰ると、アパートの前で遥のお母さんに出会った。
現在三十九歳で三人の子持ちだが、綺麗だしとても若く見え、まだ
二十台と言っても誰も疑わないだろう。

「シヨウくん、お帰り」

「あ、おばさん、ただいま。どうしたの？」

「シヨウくん、今日ご飯食べに来れないんでしょ？」

お弁当作って来たから、バイトは食べてから行きなさい」

「・・・いつも、ありがとうございます。」

遥から電話でも有ったの？」

「ええ、シヨウくんに何か食べさせて、ってね。」

でも、ホントにシヨウくん最近痩せてきてるわよ」

「大丈夫だよ、おばさん。俺ちよつと太ってたからちよつど良いよ」

「無理しちゃダメよ。明日は食べに来れるの？」

「うん、お邪魔するね」

「そう！じゃあシヨウくんの好きな唐揚げにするわね」

部屋に入り、弁当を開ける。

肉じゃがとシユウマイに、ご飯が山盛りだ。

「いただきます！」

バツと頭を下げ、ガツガツと食べる。

おばさん、遥、ありがとな。

バイトが終ったのは10時過ぎ、流石に疲れたぜ。

やべ、明日の課題やってねえ。だけど今からやる元気は出ないなあ。

朝早く起きて、新聞配達の前にやろうかな？

やれやれと憂鬱な気分になりながらアパートに戻ると、

俺の部屋に電気が点いてる。ありや、消し忘れたっけ？

「おかえり、シヨウ」

「シヨウ兄ちゃんお帰りなさい！」

「遙！それにカナサリも一緒か！」

不審に思いながらカギを開けて部屋に入ると、三人の女の子に迎えられた。

香奈と沙里は遙の妹で双子。現在小学五年生。

子供らしくキャピキャピしている香奈と物静かで大人びている沙里は、

美形一家の血をしつかりと引き、二人ともとても可愛い。

飛びついてくる香奈を抱き止め、靴を脱ぎ部屋に入ると、

「お帰りなさい、お兄ちゃん」

沙里もにつこりと愛らしく微笑みながら声を掛けて来た。

「ああ、ただいま。」

遙、どうかしたのか？

「ん、アンタまだ選択歴史の課題やってないでしょ？」

疲れてるだろうから今日はサービスで私の見せて上げる」

「うお！そりゃ助かる！神様仏様遙様！！」

「た・だ・し！条件がひとつ！」

…嫌な予感がする…

「アンタが今日貰ったラブレター、見せなさいよ」

…予感、的中…

「断る」

「なんでよ！良いじゃない減るもんじゃなしっ！」「このバカ女め。」

「お前な。何故ダメかは考えりゃ解るだろ？」

「ハア？そんな自分勝手な理屈が解る訳無いじゃないの！」

「じゃあ、お前が芳野先輩から貰ったラヴレター、俺に見せてみよう」

「ななな何言つてのよバカじゃないのアンタ！見せる訳無いじゃないっ！！」

…… もう返す気力も出て来ねえよ。

「ねえねえ、ハル姉の負けだよ？」

沙里が呆れた顔で言い放つ。

「沙里は黙ってなさいっ！！」

「んとね、ハル姉がわがままだとおもうの」

香奈も突っ込む。

「……！！」

顔を真っ赤にして絶句している遥。馬鹿め、妹に諭されやがって。

「ハル姉はシヨウお兄ちゃんの事が好きなんじゃないの？」

いきなりの沙里の言葉に遥がスッテンと後ろにひっくり返る。

本当にひっくり返るんだよなコイツ。

このリアクション大魔王め。

「沙里っ！冗談も休み休み言いなさいよっ！」

でかい声出すなよ、もう十一時過ぎてんだから。

「じょうだん。ふう。じょうだん。はあ」

香奈が妙な事を呟きます。

「…何やってんのよ香奈」

「じょうだんを休み休み言ってるの」

「……！もう帰るっ！！バカシヨウ死んじゃえっ！！」

俺かよ。

「おやすみなさいお兄ちゃん」

「また遊んでね〜シヨウ兄ちゃん!」

飛び出していった遙を追ってツインスも帰った。
なんか、アホみたいに疲れたな。

ん? 遙のヤツ、課題のノート置いてきやがった。
多分、ワザとだな、遙のヤツ。ありがとよ。

翌朝はなぜか遙の襲撃が無く、俺は普通に通学出来た。

教室にカバンを置き、遙のクラスである二年A組へ向かう。
俺がドアを開けると、遙と人気を二分するミス我が校の南 亜由美
が立っていた。

「あら、シヨウ君。久し振りね!」

おつとりお嬢様系の彼女も全校生徒の憧れの的だ。

運動系ヒロイン代表が遙、文科系ヒロイン代表が南と、二年A組の
ラインナップは全校一だ。

「おはよう、南? ところで遙来てるか?」

「遙ちゃんならまだ来てないわ。まだ部活終ってないんじゃないの
かしら?」

その時、南の後ろから甘いマスクの長身野郎が現れた。

出たな、ホスト竹村。コイツは弓道部の現副主将で、次期主将だ。
性格もまあまあ、ルックスは抜群なので当然良くモテる。

「やあ、シヨウ。遙ちゃんなら今日は来てないぞ?」

なんでも、風邪引いたってお母さんから電話有ったって」

「え? マジか? 解った、ありがとう」

「あら、もう行くの? って、そろそろHRか。またねシヨウくん!」
南の声を聞き流しながら俺は教室に戻った。

どうしたかな、遙のヤツ。帰ったら見舞いに行くかな。

キンコーンカーンコーン

よっしゃ放課後！さつさと帰るかな。

「ちよつと、シヨウくん！もう帰るの？」

振り向くと、腕組した和泉が俺を睨んでいる。

つと！手紙の事忘れてた！
ラブレター

「いや、ちよつと用事が有るからもう少し居るが。お前は何か俺に用かい？」

「あ、そう、なら良いわ。なんでもないから」

「なんだそりゃ？」

「じゃあねー！！」

なんなんだアイツは？

さて、美術室、ね。

でも、もしかして美術部が活動してんじゃないのか？

トコトコと歩いて美術室に辿り着く俺。

さて、こういう時はノックしたほうが良いのか？

まあ一応やっとくか。

コンコン。

「は、はい！ど、どうぞ」

可愛い声で中から返事が来た。

さて、ドアには黒板消しは挟まってないな。水の入ったバケツも仕掛けてなさそうだ。

「失礼します」

俺は美術室のドアをそつと開けた。

告白？

そこには、ちょっと驚くほどの美少女が立っていた。

長い黒髪をツインテールにまとめ、小さな顔にはぱっちりお目目とおちよぼ口。

つんと尖った鼻に細い首。ほっそりとしたたおやかな体。細くて白い足。

うん、遥&南のミス我が校・正統後継者の資格バッチリだ。

「あ、あの、先輩、こんなトコに呼び出しちゃってごめんなさい」
可愛らしい声を振るわせて話し出す彼女。

シチュエーション

この状況、普通の健康な男子高校生ならば躍り上がって喜ぶだろう。しかし、各種バイトで世間の荒波に揉まれている俺には何かの間違いにしか思えねえ。

そうだ！まだ彼女は名乗っていない。つまり、彼女が西村何某とは限らないんだよな。
なまえわすれた

彼女はきつと西村以下略に頼まれて、俺をおびき出すエサだ。
ふふふ、騙されないぞ。ふひひひ！

「あ、あの、先輩大丈夫ですか？」

「え？」

「なにか、奇妙な笑い方してましたけど・・・」

やべえ、声に出たのか。

「ご、ごめん、大丈夫。で、キミの名前は？」

「・・・え？あの、私、西村亜里沙、ですけど・・・」

「・・・あれ？」

「え・・・？」

予測つてのはいつでも裏切られる為にあるのか。

「え」と、昨日俺にラヴレターくれた、西村さん？」

ボン！と赤くなる彼女。

「・・・はい、そうです・・・」

と、言う事は、何かの仕込だ。ドッキリカメラだ。古いな俺も。どこかに誰かが隠れてないか？

キョロキョロと辺りを見廻す俺。

そんな俺を見てオロオロとする西村。

なんだこのあからさまに異様な雰囲気・・・。

・・・とりあえず敵の出方を見てみるか。

「え、と。つまり西村さんは俺を好きになってくれた、と？」

「は、はい・・・。四月に入学して直ぐに先輩に優しくしてもらってから、ずっと気になってました・・・」

・・・そんな事有ったかな・・・？

これだけの美少女なら覚えてると思うんだけどな・・・

あ！

「もしかして、自転車がパンクしてた子か！」

「はい！そうです！帰りにパンクしてて、まだ誰も友達居なかったから途方に暮れてたら

先輩がどうした、って声掛けてくれて、すぐに直してくれました・

・・・」

おー。あつたあつたそんな事。

だけど、こんな美少女だったか・・・？

「あの頃、まだ私メガネしてたし、髪もお下げだったし・・・」

そう言えばあの純朴田舎娘の面影があるわ。変われば変わるもんだねえ。

・・・女って怖えな・・・

「それで！先輩の事をだんだん好きになったんだけど、先輩には仲の良い人が居たので・・・」

遥、か。

「だけど、その人には彼氏が居て、校内No.1カップルだって聞いて、おかしいな、って・・・」

ふむふむ。

「だから、部の先輩に確認してもらえる様に頼んだんです。先輩とあの人が本当に付き合っていないかどうか」

そうか！和泉は美術部だったな！オーケー、理解した。

俺の思考回路が汚れまくっていただけか。すまん、和泉！

「先輩、何を拝んでいるんですか・・・？」

あ。また出てた。なんか最近どうもセルフコントロールが上手いかな。

「ああ、ごめんなんでもない」

「えと、それで、先輩は若宮さんと付き合っていないんですよね・・・？」

若宮 遥。ヤツのフルネームだ。若宮って言われても一瞬誰か解らなかったぜ。

「ああ。遥は幼馴染だけど付き合ったことは一度もないし今も違うま、兄妹みたいなもんだな」

西村が目を輝かせる。可愛いな、この娘。

「じゃあ、先輩は今お付き合いしてる人とか居ないんですか？」
ちよつと上目遣いになり、俺を見ながら聞いてくる。

「ああ、居ない。完全無欠のフリーマンだね」

「じゃあ！！あの、その・・・私と！お付き合いしてただけませんか！！」

意を決したように告白する西村。

よっしゃー！きたー！俺にも春が！！・・・でも、な。
「・・・返事、明日で良いかな？」

ガタン！

・・・なんか、どっかから誰かがずっとこけた様な音がしたが・・・？

「は、はい！明日、ここでまた待ってます」

「うん、ごめんな。俺、キミみたいに可愛い娘に告ってもらえるなんて初めてだから、

ちよつと混乱してるんだ。明日、必ず返事するから」

「はい、待ってます・・・」

胸の前で手を組み、潤んだ瞳で俺を見る西村。うあ。今すぐ抱き締めてみてえ。

「じゃあ、また明日な」

「はい、さようなら先輩」

廊下に出て歩き出す。

・・・なんで、その場でオッケー出さなかったんだろ俺・・・？

西村亜里沙。

顔、可愛い。性格、良さそう。髪、綺麗な黒髪だしツインテールは萌える。

胸、不明。でもペタンコじゃなさそう。プロポーション、不明。でもすらつとしてたな。

総合評価、十段階中、九以上。文句無し！

・・・でもな、今の俺の状況を考えると、楽しい青春なんて無理だろ・・・

うつむと唸りながら下駄箱に來ると、和泉とその他数人の女子が腕

を組んで仁王立ちしていた。

「シヨウくん、ちょっと顔貸して」

「な、なんだよ、どうした？」

「いいから！こっち来て！」

そのまま体育館裏に引つ張って行かれる。

なんだなんだ、なんで俺がこんな目に？

「どー言う事！？」

和泉が詰め寄る。

「何が？」

「何がじゃないわよ！亜里沙の事よ！」

ああ、やっぱり隠れて聞いてたんだなお前ら。

「そうよ。だってあの子放つとけないんだもん！」

なんで女つてのはこうなんだ・・・

「遥とも付き合つてないし、他に彼女も居ない。なのになんであんな可愛くて良い子から

告られて考えさせてくれ、になるわけ？意味解んない！！」

・・・そう、遥^{アイツ}なんで学校休んだんだよ・・・？見舞いに行かなきゃな。

「ねえ、なんで！？答えなさいよ！！」

・・・仕方無えな。

「・・・ああ、俺は一年前に家族亡くしただろ？」

それで自分の食い扶持と進学費用稼ぐのにバイト三昧なのも知ってるよな？」

「う、うん・・・」

「毎朝の新聞配達、一日置きと日曜のガススタ、土曜夜のコンビニ・・・」

西村みたいに可愛い彼女が出来たら、デートしたいじゃない。

可愛い彼女には奢って上げたいじゃない。でも、俺にはそんな時間金も無い」

「・・・」俯く女共。

「それに、西村だってあの可愛さだ。狙ってるヤツだって多いって聞くぜ」

これはデマカセだがあながち嘘にはなるまい。

「一緒に居る時間もそうそう作れない俺の事なんか、直ぐイヤになるさ。」

そして俺は振られる・・・だけどその頃には俺が西村に夢中になつてて、

振られた事でもの凄えダメージを受けてバイトも学校もイヤになつて引きこもる・・・

そんな未来予想図が俺の中に展開されたのさ、さつき

「・・・」

「だから、今夜一晩考えてみて、それでもなんとか出来そうと思つたらオーケーするさ。そういう訳だ」

「・・・ごめんなさい。私達が軽率だったわ・・・」

「いいさ、気にすんなよ。西村には内緒だぜ。じゃあ、帰って良いか？」

「うん、さよなら・・・」

しゅんとなつた女共を後にして、俺は学校を出た。

さつきの言葉に嘘は無い。が、それだけか？

西村に告白されながら考えていた事。

それは、真っ赤になつて怒っていた、昨夜の遥の事だった。

なんだか、自分でも意味不明だわまつたく。

混乱？

自転車を漕ぎまくり、とりあえず自分の部屋に帰る。

荷物を置き、遥の家へ急ぐ。

途中でコンビニに寄って遥の好きなガ　君ソーダを十個買い込む。

俺の部屋から遥の家までは徒歩三分、あっという間に辿り着く。

ピンポン！

「はい、どちら様？」

「あ、シヨウです。こんにちは」

「あら、シヨウくん！今開けるわね」

ガチャ、とドアが開けてカナサリが出てくる。

「シヨウ兄ちゃんいらっしやーい！」「こんにちはお兄ちゃん」

どーんと飛びついてくる香奈を受け止め、沙里の頭を撫ぜる。

「お邪魔します」

玄関を上がると、包丁を持ったおばさんが現れた。

「おかえりなさい。早かったのね。」

「ご飯は六時頃で良いかしら？」

「うん、ありがとうおばさん。」

遥、今日休みだったよね。どうしたの？」

わーアイスだー！と大騒ぎする香奈にコンビニ袋を渡す。

「あら、ありがとうね。そんな気を使わなくてもいいのに…。」

遥、ね。なんだか頭が痛いつてぶすくれているの。熱は無いのにね」
なんだか意味有りげな微笑を浮べるおばさん。

「昨夜シヨウくんの部屋から帰ってきてからなんか不貞腐れてるみたいなのよ。」

あ、シヨウくん、ラヴレター貰ったんですって！？」

ぶっ！！

「な、なんで知ってるの！？」

「えへへ、喋っちゃった！」

香奈か！

「香奈は口軽いんだから…」

沙里がぼそつと非難する。

「良いのよ！ ショウくん。やっぱり青春しないとね」

ウインクするおばさん。色っぽいな…。

「遥あおいの頭痛もその辺に原因が有るかもよ？」

どういう意味でしょう？

「とりあえず、見舞ってやって。遥は部屋に居るわ」

「うん、じゃあ行って来るね」

「あたしも」

「香奈はいいの！ 沙里、香奈抑えて」「はいママ」

武士の情け〜！と騒ぐ香奈を殿中でござる、と言いながら抑える沙里。

時代劇好きのお父さんの影響受けてんな…

階段を上り、「ハルカ在室中 ノックしなさいよね！」

と札の掛かったドアをノックする。

返事が無い。寝てんのか？

「遥、俺だ。寝てるのか？」

ドタドタドスン！ ガタンゴトン！！

な、なんだ…なんの騒ぎだ…？

ガチャ

「何よ…」

うわ、ホントにぶすくれてるな。

「おう、大丈夫か？ 頭痛するんだって？ ほら、これ」

「きゃー！ ガガ君〜！！」

ホントに頭痛してんのか？

「…まあ、入りなさいよ」

「ああ、お邪魔」

遙の部屋に入ると、ソーダの様な甘い香りがする。

結構女の子らしい、水色とピンクのファンシーな部屋だ。

「ん」

クッションを渡されたので敷いて座る。

「あ、これサンキューな。助かった」

昨日、俺の部屋に忘れて行った課題のノートを返す。

「ん」

ノートを受け取り、机に放る遙。

「で、具合はどうなんだ？」

「…もう大丈夫」「そうか」

話が続かねえ…

遙はクッションの上にペタンと座り、

クマのヌイグルミを抱き締めながらアイスを食っている。

時々俺をチラッと見るが、目が合うとぷいっと逸らす。

仕方ねえな。

「今日の放課後、例のラブレターの主と会ってきたぜ」

バツと俺に目を向ける遙。

「一年の西村亜里沙っていう可愛い子だったよ。知ってるか？」

「…知ってる。美術部の和泉の後輩でしょ？ ツインテールの可愛いらしい子」

「詳しいな。で、俺はまさかあんな可愛い子が俺にラブ。してるなんて信じられなくてな…」

「ラブ。って言うな。で？」

俺は西村との顛末を面白おかしく遙に話した。

誰かの罠だと思って拳動不審になった事、和泉とその一味が隠れ聞きしてた事…

遙は大笑いして聞いていたが、

「それで、返事はどうするの？」と聞いてきた。

「正直、悩んでる。和泉たちに話した事も嘘じゃないしな、それに

…」

「それに？」

「…気になるヤツも居るしな」

「へえ、アンタみたいな朴念仁でもラブ。してる子が居るのお？」

「ラブ。って言うな。それに、まだラブ。かどうかハッキリしないしな」

「ふーん。ねえ、誰よそれ。あたしの知ってる娘？」

「それは秘密だ」「何よーケチー！！」

口をアヒルの様に尖らせる遙。この顔、俺のお気に入りなんだよな…

「…ねえシヨウ、もしかして亜由美じゃないの？」

「南か？なんでそう思う？」

「亜由美綺麗だし性格良いし、お嬢様だし、あの子も結構アンタの事気に入ってるみたいだし」

「マジか！？なんでそんな事お前が知ってるんだ？」

「亜由美が私に良く聞いてくるのよ。シヨウくん元気？とか、シヨウくんにご飯作って上げたら喜ぶかな？とか」

「ああ、それはアレだ。南とも小学生からの長い付き合いだからな。きつと家族亡くした俺の事を可哀想だと思ってくれてるんだろ」
ハア、と呆れた様に溜息をつく遙。

「…まあそれも有るでしょうけど、あの子、昔アンタの事好きだったのよ？」

「…初耳だな、おい。いつ頃だ？」

「小学五年から中一位に掛けてかな。」

でもあの頃って妙に男子と女子の雰囲気が悪かったじゃない」
「あーあー、なんか男女差別だなんだって騒いでた頃だな。」

でもあれ一部の男子と女子だろ？俺は関係無かったけどな」

「男子はそれぞれだったけど、女子は結構みんなで騒いでたのよ。女ってそういう所イヤらしいじゃない。」

私みたいに元気な子はアンタとかと遊んでも平気だったけど、

亜由美みたいなおつとり系はそんな事したら苛められかねなかったからね」

「なるほどな…って事は、俺からアクション起こせば南が落ちるかもしれないって事か」

「！っ！バツカじゃないのアンタ！何そのエロ思考回路っ！！」

可愛けりや誰でもいいってワケえ！？」

「いや、言ってみただけだ。そんな積りは全く無いがな」

「…紛らわしい事言わないでよバカ！」

ぷいっつと横を向く遥。

ジトつとした横目で俺を睨みつつ、

「で、亜里沙ちゃんの事はどうするの？」

と聞いて来た。

「ん…どうすっかな。お前はもうしたら良いと思う？」

「そんな事なんであたしに聞くのよ…」

妙な雰囲気の中、ガンを飛ばし合う俺達。

ピンポン

玄関のチャイムが鳴り、誰かが来たようだ。おじさんが帰ってくるにはちよつと早いな。

コンコン。

遥の部屋のドアがノックされる。

「はい？」遥の返事に応えておぼさんの声がした。

「ハルちゃん？芳野くんが見えたけど…」

「え…博隆が…？」
ひろたか

芳野博隆。当校三年C組、剣道部現主将にして遥の彼氏。

頭脳明晰容姿端麗性格拔群家柄良好学業優秀熱血御礼。

まさに少年マンガの主人公が抜け出てきたような色男だ。
ナイスガイ

女子からの人気はもちろん、男子からも人気が高く不良連中も一目

置いている。

受験は国立一本で既に当確出ている、っと。解説終り。
やっぱこの世は不公平だぜ。

「行つて来いよ。その間に俺はカナサリの部屋に退避しとく」

「…ん、ごめんね。でも大丈夫、部屋には上げないから」
なんで謝るんだよ。

「ママ、ちよつと着替えてから行くって言つといて」

「解ったわ。リビングに上がってもらっておくから。」

シヨウくん、芳野くんがウチ来るの初めてだからね」

…なんでそんな事を俺に言うんですかおばさん。

「じゃあ、ちよつと行つて来る。マンガでも読んで」

「ああ」

遥はそう言つと着替えを持ってカナサリの部屋へ向かった。

忘却？

遙が階段を降りていく音が聞え、階下から談笑の声が聞こえ出す。なんとなく寂しい気持ちになりながら、本棚からパタリを引っ張り出そうと

手を伸ばした時、本棚の間に何かが挟まっているのを見付けた。良く見ると、それは手紙の束。何気なく引っ張り出してみる。

「若宮 遙様」と宛名書きされているその封筒を裏返すと、
「博隆より愛を込めて」

と書かれていて思わず吹き出す。

芳野先輩からのラブレターかよ…

まあ、俺が西村から貰ったラブレターの宛名の

「愛しのシヨウ様へ」

つてのもアレだが、女の子が書いたと思えばまだ可愛いモンだ。

つと、こんな事してちゃマズイよな。

元のところに戻して、と…

ピンポン！

また誰か来たのか？千客万来だな今日は…

「ただいま」

「あら、お帰りなさいあなた。」

「お帰りパパー！」

おつと、おじさんが帰ってきたのか。

「あ、お邪魔してます。始めまして！」

芳野先輩の爽やかな挨拶が聞える。

時間は午後六時、そろそろメシだよな…

現在時刻、午後七時。

階下からは楽しげな談笑の音が絶えない。

どうやら芳野先輩も食事していく様だな。ってか、もう食べてるよ
うだ。

「おかわりいかが？」

…おばさん、ちょっと残酷だよそれ…

どうも俺はすっかりすっかり忘れられている様だな…

ガチャ

「お兄ちゃん、大丈夫？」

「…沙里、か」

「ごめんなさい、ママもハル姉も忘れっぽいから、

お兄ちゃんの事忘れてるみたい…」

あ、やっぱり。

「そつか、じゃあ俺帰るわ。今、皆リビングに居るんだよね？」

「うん…」

「オツケー、じゃあ気付かれない様に出られるな。内緒だぜ、沙里」

「でも！お兄ちゃんが可哀想…」

両目に涙を溜めている沙里。

俺は沙里を抱っこして涙をハンカチで拭いてやる。

「良いんだよ、沙里。俺はキミのママにも遥にもいつもお世話にな
ってるからね。」

「こんな事位なんでもないから」

「でも、でも…」

「優しいね、沙里は。俺はそんな沙里の事大好きだよ」

「え…」

かあつと赤くなる沙里。

「じゃあ、行くよ。また今度遊ぼうね」

「お兄ちゃん！ちよつと待って」

「ん？」

立ち上がった沙里は俺のほっぺにキスしてくれた。

「お兄ちゃん、沙里も大好きだよ」

「ありがとう、それじゃまたね」

俺はそつと階段を降り、靴を履くと静かに玄関を出た。

あははは、と一際大きく笑い声が弾ける。

ま、こんなもんだろ。

俺は胸を吹き抜ける何とも言えない感覚を持余しながら部屋に帰った。

部屋に入ると何故か涙が溢れ出す。

いや、別におばさんにも遥にも腹なんか立っていない。

っていうか、感謝こそすれ腹を立てるなんてとんでもない。

だけど、この自分でも解らない感情はどうしたら良いのだろう。

「久々に、走るか……」

俺はヘルメットとグローブ、そしてキーを持ち駐輪場に向かった。
愛車・ヤマハDT50にキーを差込み、チョークを引いてキック一発、

ポロン！と軽やかな音と共に一発で始動した。

直ぐにチョークを戻し、軽くアクセルを煽って暖気する。

ヘルメットを被りグローブをして、夜の街へと走り出す。

高校に入ると同時に学校に内緒で免許を取り、

バイトして稼いだ五万円で近所の自転車屋から買った。

規制前のモデルなのでらくらく90km/hは出る。

俺は何となく海が見たくなり、ギアを二段落としてアクセルを全開にした。

この胸の寂寥感とでも言うべき気持ちがスピードで振り切れれば良いと思いつながら。

「それじゃ、そろそろお暇します。ご飯ご馳走様でした！」

博隆が爽やかに挨拶し、ソファから立ち上がる。

「でも、遙さんの具合も良くなつて安心しました」

「なんだ、もつとゆつくりしていけば良いのに」

「イ感覺到酔つ払ったパパが引き止める。」

「あなた、もう九時近いんですから。ごめんね、芳野くん、

これに懲りずにまた気軽に来てね」

「いえ、とんでもないです、素敵なお父さんとお母さんで羨ましいです」

「芳野お兄ちゃん、また来てね！」

「ありがとう、香奈ちゃん。また来るよ」

「…あら、沙里は？」「二階に居るみたい」

私は博隆を外まで見送る為に玄関を出た。

「じゃあ、遥また明日な」

「うん、ありがとね博隆」

「おやすみ、愛してるよ」

「もう、バカ…私も」

博隆のほっぺにキスをする。

「気をつけてね！」

自転車に跨り帰っていく博隆。

さて、家に入って、と…

あら？沙里が降りてきたわ。

「どうしたの、沙里？怖い顔して」

「…リビングに入って」

「何よ？…泣いてるの？どうしたの？」

「いいから！リビングに入って！！」

泣きながら大声で怒鳴る沙里。

この娘がこんな声だすなんて…？

「どうしたの、沙里！何で泣いてるの？」

ママが驚いて出てくる。パパと香奈もそれに続く。

「ママのバカ！ハル姉の大バカっ！！」

沙里の剣幕に呆気にとられる私達。

「ふえっ…シヨウ、ひつく、兄ちゃんの事、ひつく、忘れてたでしよっ…！」

「！あっ！」「いけないっ…！」

うわーん、と泣きながらパパに縋り付く沙里。

ママと私は押し黙ってしまっ…

「何だ？どうしたんだ沙里？シヨウがどうしたんだって？」

沙里を抱き上げたパパは混乱している。

「シヨウ！」階段を駆け上がろうとする私。

「バカ姉っ！ひつく、もう帰ったよっ！ふえーん…！」

「何てこと…私ったら…」

ママが両手を口に当てて涙ぐんでいる。

「シヨウの部屋行つて来る！」

飛び出す私。

バカバカバカバカバカ私のバカっ…！！

自分を罵倒しながら夜道を走る。

シヨウのアパートに辿り着き、ドアの前に立つ。

電気が消えてる…

コンコン

返事は無い。

コンコン

「シヨウ、居ないの…？」

気配も無い。駐輪場を見に行くと、シヨウのDT50が無い。

今日はバイト無いよね…

どこかに走りに行ったのかな…

トボトボと歩いて家に戻ると、パパとママが玄関の前に立っていた。

「ママと沙里から話は聞いた。可哀想な事をしてしまったな…」

「ごめんなさい、遙…私が迂闊だったわ…」

しゃくり上げながらママが謝る。

「うっん、私だって同じだわ…どうしよう…」

「沙里の話では、ショウは怒ってないそうだから

明日もう一度ご飯に呼んで、しっかり謝ろう。な」

パパがママの背中を撫ぜながら言う。

「孤独に耐えて頑張ってるショウくんは、なんて酷い事しちゃったの…」

ママが顔を覆って泣き出してしまふ。私も思わず涙が溢れてくる。

沙里は泣き疲れた様で、パパの膝で寝息を立てている。

香奈は沙里の剣幕に驚いて、二階の部屋に引っ込んでしまった。

どうしよう、明日、ショウの顔見れないよ…

寂寥？

しばらく走り、海に見える公園に辿り着く。

高台に有るこの公園は絶好のデートコースだが、

まだ時間が早いので犬の散歩やランニングしている人も多い。

綺麗に港が見えるベンチに座り、コンビニで買ってきたサンドイッチを取り出す。

パッケージを開き、もしよもしよと頬張りコーラで流し込む。

ふいに流れ出す涙を拭うのも面倒で、俺は泣きながら無心にサンドイッチを食べていた。

なにやら賑やかな男女のグループが近付いてくる。

酔っ払っている様で、きやはは、と陽気な笑い声をする。

大学生だろうか？流石に泣き顔を見られるのは何なので、急いでティッシュを取り出し涙と鼻水を拭く。

サンドイッチをもう一つ取り出し、食べ始めた時

俺の前を通り掛かったグループの一人が突然足を止めた。

「…ねえ、シヨウくんじゃない？」

「え？」

聞き覚えの有る声で呼ばれた俺は驚いて顔を上げる。

そこには、今日学校で見たばかりの顔が微笑んでいた。

「南…か？」

少し派手な化粧をしているが、間違いなく遥と同じA組で、

俺や遥とは小学校以来の付き合いである南 亜由美だった。

「きやはっ！やっぱいい！ねえどうしたのこんな所でそんな物食べ
て？」

今日は遙ちゃんの家で夕飯食べるんじゃないかった？」

「ああ、ちよっと俺に用事が出来てさ…って、お前こそどうしたんだ？」

そんな派手な格好して、しかも酒飲んでないか？」

「えへへ、優等生な私がこんな事してるなんて思わなかったでしょ？最近、クラブとかにハマっちゃってね。ちょっとしたストレス解消よ」

何事かと見守っていたグループの男が声を掛けてくる。

「おい、亜由美、知り合いか？」

「えへへ、私の彼氏なの！」

「何い！？」「えゝ！マジなの亜由美ゝ！？」

「ちょ、南！」かなり慌てる俺。

「なゝんて、うつそ 幼馴染よ。ね、シヨウくん」

「脅かすなよ…俺、亜由美狙ってたから」

いかにも遊び人、と言った風情の茶髪男が安心した様に呟く。

「えゝ、秀雄はパスするわ私」

「おいおい、亜由美そりゃ無えぜ！」

きやはは、と大騒ぎになる。

いかん、こう言う雰囲気は馴染めないな…

特に今は。

「南、それじゃ俺行くわ。程ほどにしとけよ」

ベンチから立ち上がり、手を上げて歩き出す俺。

「あん、待ってよ！シヨウくんも遊びに行こうよ。ね？」

「いや、俺はいいよ。明日も新聞配達あるし帰って寝るわ」

ヒュー、と口笛が聞え、茶髪男がニヤニヤしながらからかう様に言う。

「へえゝ、今時新聞配達してる高校生が居るなんて驚きだ！

よ、勤労青年頑張ってるね！そりゃ、早く帰って寝るべきだ！」

カチン、と来たが相手にしても仕方無い。この手のバカは無視が一番。

「何よ！その言い方！」

…おい、南。お前が怒らなくてもいいだろ。

「シヨウくんはね、自分で頑張って生活費や進学費用を稼いでるんだから！」

秀雄みたいにバイトもせずにお小遣い貰って遊んでるんじゃないんだからね！」

「なんだそりゃ。親は金くんねーのかよ。スパルタ教育ってやつか？

あ、それとも貧乏で仕送りもしてもらえねーのか！

情けない親だな〜！ぎやはははは！！」

「秀雄っ！！！」

俺は南の肩を掴み、横にどけながら茶髪男を睨みつつ言った。

「もう一度言ってみろ…」

「ダメ！シヨウくん！」

「な、なんだ、やんのか temeエ！」

「バカ！シヨウくんは空手二段なんだから！謝りなさいよ！」

「へっ！そんなの怖かねーよ！ケンカの場合数とは違うんだよ！」

「ダメ！止めて！」

南は半泣きになりながら俺に抱き付いてきた。

「お願い、シヨウくん…こんなトコでケンカしちゃダメだよ…」

俺の首筋に唇を当てて呟く亜由美。

そういえば、昔こんな事あったよな…

俺達がまだ男も女も無く子犬の様に転がりまわって遊んでた頃、

俺と遥が本気で殴り合いのケンカになった時に

やっぱりこんな風に亜由美が止めたっけ…

「解ったよ、亜由美」

「シヨウくん…」

俺は亜由美の手をそつと解き、振り向いて歩き出した。

「なんだよ！掛かってこねーのかよ！このヘタレ野郎！」

茶髪が喚いているが、俺は構わず歩き続ける。

「バカ！あんななんか絶交だから！！！」

怒鳴る亜由美の声が小さく聞える。

俺はDTに跨り、走り出した。

部屋に戻ったのは午前一時を廻っていた。

後三時間すれば新聞配達か…寝たら起きれそうに無いな。だけど、ちよつとでも寝とかないと明日キツイな。

俺は電気を消し、布団に潜り込んだ。

なんだか、何もかもどうでも良くなってきたな…

進学、か。別に大学に行かなければ

こんな苦勞してバイトしなくても良いんだよな。

就職すれば、普通に暮らせるしな。

どうすっかな…何もかも面倒臭えや…

いつの間にか俺は深い眠りに落ちて行つた。

三時間後、なんとか起きて配達を終え部屋に戻る。

時間は午前五時半。

もう一時間くらい寝れるけど、そうすると起きれないかもしれない。とりあえず、学校行つて寝るか。そうすれば寝坊はしないだろ。

俺はカバンを持ち、自転車に乗って朝もやの中を走り出した。

結局眠れずに朝になつちやつた…。

シヨウ、新聞配達から帰つて来てるよね。

あたしはそのそと起き上がり、階段降りて台所に行く。

ママがお弁当を作っている。

「ママ、おはよう…」

「あ、おはよう…早いね、まだ五時半よ」

ふと見ると大きなお弁当箱に唐揚げをいっぱい詰めて入っている。

「…それ、シヨウのぶん？」

「ええ、今日シヨウちゃんに届けてくれる？」

「うん。あと、おにぎり作るね」

シヨウの朝御飯代わりのおにぎりはあたしが作っている。

シヨウは気付いてないみたいだけど。

カバンとお弁当を持ち、シヨウの部屋へ向かう。

コンコン

「シヨウ、起きてる?」

.....

返事が無い。

「シヨウ、寝てるの?」

ふと見ると、もうシヨウの自転車が無い。

「もう行っちゃったの...? やっぱ、怒ってるの...?」

涙がポロポロと溢れてくる。

なんでこんなに哀しいんだろう。なんでこんなに胸が痛いんだろう。

私はトボトボと家に戻り、自分の自転車を出して駅に向かった。

交錯？

まだあまり人も居ない学校に着き、教室へ向かう。
教室にはまだ誰も居ない。一番乗りは初めてだな。

席に着き、大きな欠伸を一つしてから机に突っ伏して目を閉じる。
あつという間に意識が遠くなって行く。

なんだか、すげえ疲れてるな…

「シヨウ、起きろよ、シヨウ！」

…ん？

目を覚ますと目の前に鈴木の様。

ああ、もう授業か？

「客が来てんぞ」

俺が顔を上げると、鈴木は教室の入り口を指さして言う。

まだ寝惚けたままの頭でそちらを見ると、

そこには亜由美の姿が有った。

「サンキュ」

鈴木に礼を言つて亜由美の元へと向かう。

「おはよ、シヨウくん」

「ああ、おはよう亜由美。どうした？」

「…昨夜はごめんね。嫌な思いさせちゃって」

「ああ、気にしてないよ。俺こそ悪かったな、

お前も気まづくなっちゃったろ？」

「うつん、大丈夫。もう会わないから」

「…そうか。それが良いかもな」

亜由美の顔が少し赤い。どうしたんだろ？

「ね、シヨウくん、今日はお弁当持ってきてるの？」

「いや、持ってきてないけど」

「じゃあ、これ食べて！私が作ったの…」

亜由美が可愛いバンダナに包まれた大きな弁当箱を差し出す。

「え？良いのか？」

「うん、昨日のお詫びも兼ねて。シヨウくんの為に今朝一生懸命作ったんだよ」

「ありがとう。喜んで頂くよ」

「うん！食べ終わったら洗わなくても良いからね。放課後、私の下駄箱に入れておいて」

「ああ、解った。ありがとう」

亜由美はニコつと微笑み、

「じゃあまたね！あ、シヨウくん、昔みたいに亜由美って呼んでくれるの嬉しいよ！」

と言つてタタつと廊下を掛けて行つた。

そう言えば、昨夜の一件で昔を思い出してから亜由美、って呼ぶようになったな。

ふつと笑いながら振り向いた俺の目の前に、

クラスの殆どの男子が凄え怖え顔をして並んでいた。

「…な、なんだ？どうした？」奴らの発する負オーラにビビる俺。

「おい、お前、南亜由美とどう言う関係だ」

「まさか付き合ってるんじゃないやねえだろうな？」

…なるほど、誤解したか。

「違つて。ちよつと亜由美の困つてた事を解決してやったから、お礼にこの弁当作ってくれただけだつて」

冷や汗掻きながらとりあえずデマカセを言う。

「なぜ亜由美とか呼び捨てにしてるんだ…」

「亜由美と俺は小学校からの幼馴染なんだ！」

「そりゃ若宮の事じゃ無かつたのか？」

「だから！遙も亜由美も幼馴染なんだつて…！」

野郎共は何とか納得したらしく、席に戻っていく。

ああ、マジ怖かつた。

シヨウにお弁当渡さなきゃいけないのに、朝はシヨウの顔を見るのが怖くて渡しに行けなかった。

休み時間の度にお弁当を持って行ったり来たりしている。

今日の朝練は散々で、先生から休んでろって言われちゃうし…

いけない、こんなのあたしらしくない！

よし、女は度胸！

両手で自分の頬を張り、気合を入れる。

うん、昼休みになったら速攻で行くわよ！！

「ファイトお！」

「何がだ？若宮…」

「え…？あつ！？」

目の前には、古文の佐々木先生がにっこりと微笑みながら立っている。

教室中が爆笑の渦に包まれた。

は、恥い…

昼休みのチャイムが鳴り、授業が終ると同時にあたしは廊下に駆け出した。

「遙ちゃん、どうしたの？」

「ちよつとね！」

不思議そうに声を掛けてくる亜由美に言い捨てて廊下を走る。

この勢いで渡しちゃおう！ついでに一緒に食べながら昨日の事謝ちやお…

シヨウのクラスに辿り着く。シヨウは、と、居た！

「お、若宮。シヨウか？ちよつと待ってる」

顔見知りの男子が気を利かしてシヨウを呼びに行く。

鼓動を抑えつつ気合を入れ直していると、突然後ろから声を掛けられた。

「遙、何やってるんだ？」

「！博隆。どうしたのこんな所で？」

「ああ、昨夜話したろ？今日はお袋が旅行で居ないから弁当無いんだ。

これから学食行く所さ。って、なんで弁当二つ持ってた？もしかして俺の分か？」

博隆もシヨウの事は知ってるから、解って言ってるのよね。

「おう、遙、昨日は悪かったな…って、芳野先輩と一緒に。どうした？」

シヨウは博隆に会釈してから全然普通に話しかけてきた。

良かった、怒ってないみたい…

「昨日って、何か有ったのか？」

博隆が聞いてくる。なんてタイミング悪いの！

「あ…ええと、俺が遙に貸してくれて頼まれたCDを忘れちゃったんですよ」

「お前には聞いてないよ。遙、本当か？」

え？何それ？私はビックリして博隆の顔を見る。

シヨウもちょっとムツとしたみたい…

「え、ええ。本当だけど…」

「あつそう。さて、遙、早くメシ喰いに行こうぜ」

博隆が私の手を握り、無理やり引っ張る。

「ちよつと待つてよ。これは…」

「俺のだろ？当然。屋上ででも食おうぜ」

呆氣に取られた様なシヨウを残して、私は連れて行かれてしまった。

…何だったんだ、今は…？

芳野先輩に引っ張られて去った遙が俺を何とも言えない顔で見ていた。

その手には二つ、弁当が握られていた。

…もしかして一つは俺の為だったのか？いや、あのタイミングなんだから

芳野先輩に作ってきたんだろうな。遙は何をしに来たんだろうか？

って、床に何か落ちてるぞ。

これは、遥の財布だ。引つ張られた時に落としたんだな。
遥たち、屋上に行くって言うってたな。

「博隆、ちよっと待ってよ！」

屋上の手前で我に返った私は博隆の手を振りほどいた。

「このお弁当、シヨウにとってママが作ってくれたの！」

だから、シヨウに渡さなきゃ……」

「遥！いい加減にしろよ！」

いきなり怒鳴る博隆に驚き、呆気にとられる私。

「いつもシヨウ、シヨウって、お前の彼氏は一体誰なんだ！」

「……なに怒ってるの？だって、シヨウは一人ぼっちなんだし……」

「そんなのどうでも良いだろ？お前の親戚とかじゃ無いんだからほつとけよ！」

「……どうして、そんな事言うの？シヨウはママの親友だったおばさんの子だし、幼馴染だし、

何よりも大切な友達だもん、ほつとけないよ！」

「じゃあ、俺よりもあいつの方が大切って事か？」

「なんでそうなるのよ！そんなの比べられないよ！」

「じゃあ今決めろよ。俺と別れるか、あいつと縁を切るか！」

「……！どうしたの博隆！なんかおかしいよ！」

「うるさい！早く決めろよ！」博隆が私の肩を掴んで揺さぶる。

「痛い！やめてよ！」博隆の腕を振りほどく私。

その拍子にお弁当を落としてしまった。

「あっ！」

シヨウの為のお弁当が床の上に散らばる。

私はペタン、と座り込んで必死でかき集める。でも、もう殆ど食べれないよこんなの……

思わず涙が流れ出す。「えっ、酷いよ、ふえっ、」

悲しくて悔しくて思わず泣き出してしまふ。

「お前が悪いんだからな！」

捨て台詞を残して博隆は階段を駆け下りて行った。

屋上への階段を上っていると、なにやら言い争っている声が聞える。

…遙の声だな？

俺が急いで階段を駆け上がると、芳野先輩が駆け下りてきた。

俺の顔を見て、「お前のせいだ！」と一言吼えて掛けていく。

…意味不明だな…

その時、階段の上から遙の泣き声が聞こえてきた。

錯乱？

俺が急いで階段を駆け上がると、遙がぺたんと踊り場に座り込んで両手で顔を覆って泣いている。

遙の前には、ひっくり返った弁当箱とその中身が散乱していた。

「遙！どうした！」

俺は遙に駆け寄り、膝を床について遙の肩に手を置いた。

「シヨウ…」

遙は涙でぐしゃぐしゃになった顔を俺に向け、

「ごめんね、ひぐつ、シヨウの、ふえつ、お弁当…」

そこまで言つと可愛い顔をくしゃつとさせ、俺にしがみ付いて泣き出した。

俺は焦ったが、あんあんと声を上げて泣く遙が可哀想で、そして可愛くて

ぎゅゅつと抱きしめて背中を撫でてやった。

五分ほど遙を抱きしめっていると、誰かが知らせたのか遙のクラスの担任である河合由香里先生がやってきた。

彼女は豪快な姉御肌の先生で、生徒の人気No.1の美人英語教師だ。

「さて、そのバカップル、痴話喧嘩は終わったかね…」

つて、よく見れば苦学生シヨウとミス我が校の遙じゃないか。

幼馴染なのは知ってるが、ちと意外な組み合わせだね」

先生の後ろには野次馬がわんさか付いて来ている。

「どうする、保健室に行くかね？遙の膝から血も出てるし」

はつとして遙の膝を見ると、確かに血が出ている。

床で擦りむきでもしたのだろうか。

「ひつく、大丈夫、です。ひつく…」

「いや、一応保健室行こう。連れてってやるから」

「ひつく、…うん…ぐすつ」

俺は遥を抱き上げ、階段を降りだした。

「きゃあっ！ちょ、ちよっとシヨウ！」

「結構血が出てるぞ。念の為だ」

遥が真っ赤になっているが、俺は構わず歩き出す。

「きゃあ大胆！」「マジかよ！」

野次馬から嬌声上がるが、

「お黙り！怪我人運んでんだから問題ない！」

由香里先生の一喝で静かになる。

と、野次馬の中から亜由美がほつきとちり取りを持って姿を現し、

「ここの掃除はしておくから、気にしなくても大丈夫よ」

と言ってくれた。「サンキュ」と亜由美に答え、

俺は先生に礼を言つて保健室へ向かった。

「シヨウ、後で職員室に来て事情を説明して」

と言われ、取り合えずは頷いた。

だが、なんて説明すれば良いのだろうか…？

保健室で遥をベッドに寝かし、先生に手当てを頼む。

遥が手当てを受けている間にジュースを買ってきて渡す。

「ありがと…」遥は礼を言くと、ジュースをチビチビと飲み始めた。

俺は何も言わずにベッドの脇に座り、ジュースを飲む。

保険の田中先生が昼食に行くから様子を見てね、と言い残して出て行く。

少しの沈黙の後、遥が話し出した。

「ねえ、なにも聞かないの？」

「ああ、話したくなったら話してくれれば良いさ」

「…シヨウはなんでそんなに優しいの？」

昨夜、私とママはシヨウの事忘れて博隆にご飯食べさせちゃったのに…」

遥の瞳から見見る涙が溢れてくる。

俺は遥の頭に手を置き、良い子良い子とする様に撫でてやった。

「そんなの、怒るわけないだろ？誰だつてうつかりする事は有るし、俺が今までお前やおばさんやおじさんにして貰った事からすれば取るに足らない様なことじゃないか。」

感謝こそすれ、そんな事で怒るなんてとんでもないよ」

「ふえっ…ごめんねシヨウ…ふええええ…」

ありや、本格的に泣き出しちまった。

「シヨウ…大好き…」

え…？

ガバッと抱きついてくる遥。

「おい、遥…！しょうがないなあ」

俺はちよつと迷ってから、おずおずと遥の背中に両手を回して抱き締めた。

しばらくすると、遥の体から力が抜けてきた。

「おい、遥…？」

そつとベッドに寝かせると、遥はクークーと寝息を立てていた。

昨夜、きつと俺の事が気になって眠れなかつたんだろうな…

心の中が暖かくなり、昨夜の寂しい気分が跡形も無く吹き飛ぶ。

俺は無邪気な顔で眠る遥が可愛く、そして愛おしくなり

思わずそつと遥の頬にキスをしてしまい、そんな自分に焦ってカーテンから外に出た。

「おう、チュウは済んだかね？」

「おわっ…！由香里先生…！」

そこにはいつの間にか由香里先生がニヤニヤしながら椅子に座っていた。

「田中先生から留守番頼まれてさ、来てみたらお取り込み中だったから」

「いいいいつから居たんですか由香里センサー」

「うん。シヨウ大好き、辺りからかな」

うわあっ！！

「あれはですねえ遙が申し訳ない余りに口走った事であり別に俺にラヴ。してるわけじゃないと思われますそして俺自身も別に遙にラヴ。してるなんて事は無い筈でありつまりどういう事かかいつまんで省略するとですね」

「落ちて着け少年。昼飯食ったか？」

「…いえ、まだです。」

「弁当は？」「あっ！有ります」

「昼休みもそろそろ終わりだ。まあ、ここに持ってきて食いなさい。遙は私が見とくから」

「…はい」

俺は弁当を持ちに教室に戻った。ついでに、亜由美の所へ行く。

「あ！シヨウくん。遙ちゃんは大丈夫？」

「亜由美、掃除してくれてありがとうな。遙は今保健室で爆睡してる。」

これから俺は由香里先生から事情聴取だ。その前に、お前に貰った弁当頂くけどな」

「あは、まだ食べてなかったんだ。…それで、遙ちゃん一体何が有ったの？」

「うゝん、正直俺も良く解らん。何が有ったか解ったらお前にも教えるよ」

「うん、待ってるね」

俺は途中でお茶を買い、保健室へと戻った。

「おう、来たかね。まあ遠慮せずに食いたまえ」

「はい、じゃあ失礼して頂きます」

カパッと弁当箱を開ける俺。

「はうつっ！！」

ガバッと弁当箱を閉じる俺。

「…なにやつとるんだ少年。虫でも入っていたか？」

「いいえ、なんでも！やあ、今日は良い天気だなあ。ちよつと窓際に太陽光線に当たりながら食べようかな」

「…この暑いのに何言ってるんだか。まあ、勝手にしなさいな」

俺は窓際に椅子を持って行き、弁当箱を由香里先生から見えないように開けた。

…弁当のご飯の上に、ふりかけで大きくハートマークが描いてあり、その下に「愛LOVEショウくん」

とひじきとしそで書いてある。亜由美、悪ふざけしすぎだろこれは…教室で開けなくて良かったぜ…

しかし、亜由美料理上手いな。マジ美味しかったぜ弁当。食い終わった所で由香里先生が声を掛けて来る。

「じゃあ、キミと遥の次の授業の先生には話^{ナシ}付けて来てるから、事情聴取させてもらうかね」

その瞬間、五限目のチャイムが鳴り始めた。

急転回？

「で、何があつたのかね？」

由香里先生が聞いてくるが、さて、俺にも一体何がなにやら…？

「一体、何があつたんでしょかね？」

「…キミ、私をおちよくつとるのかね？」

由香里先生が微笑みながら額に青筋を立てる。

…こ、怖え…

「い、いえ、俺にも本当に解らないんですよ！」

「…いいから、キミが保健室に遥をお姫様抱つこで連れて来て、ベッドに寝かせて「シヨウ、大好き」って言われてチュウするまです」

客観的事実だけを時系列に話していきたまえ」

「わあっ！！チュウなんてして…ませ…んよ？」

「なんだその自信無さ気な自問自答は。ほれ、ちゃっちゃと喋る！喋るなら早くしろ？喋らないなら帰れ！…もちろん教室へな」

「誰の真似ですかセンサー…？」

「余計な突っ込みは入れんていい。で？」

え〜と、まずは…

「そうですね、まず昼休みに遥が俺の教室にやって来て…」

俺は、昨日の夜からの一連の流れを先生に説明した。

ふむふむと聞いていた由香里先生は、俺が話し終わるとパン！と膝を叩き、「よし、解った！」とj声を上げた。

「え…？」

戸惑う俺に説明を始める由香里先生。

「まず、芳野が遥に対して取った行動は、キミへの嫉妬だ。ヤキモ

チだ」

「はあ？なんでそんな」

「まあ最後まで聞け。」

キミと遙は幼馴染という所を差し引いても、傍から見ると仲が良すぎる。

もちろん、それはキミの人生事情による所が大きいが、

そういう事は理解はしても納得は出来ないのが人間って言うものさ。

特に、恋に恋するキミ達の世代じゃな」

「…はあ…」

「遙の事だから、芳野とデートしたり一緒に登下校してる時でもキミとの事を楽しそうに話しているだろう。」

芳野も解っているから堪えていたが、やはり納得行かなくなり、たまたま今日爆発したんだろう。まあ、間が悪かったんだな」

「…なるほど」

「だがしかし、最上級生にして剣道部主将としてはちょっと情けない行動だから、

私が放課後ちよいと事情聴取と説教を行う。キミも来てくれると有難いが」

「はい、バイトは七時からだから大丈夫です。」

でも、遙はどうしますか？」

「そうだねえ…」

考え込む由香里先生。

「あたしも、一緒に話させて下さい」

シャツとカーテンを開け、赤い目をした遙が姿を現した。

「大丈夫か？遙。もう気分は良いのか？」

「うん、大丈夫…ありがとうショウ」

「おう、復活したかね。もう平気だな？」

「はい、由香里先生もありがとうございました」

「じゃあ、放課後に一度職員室に集合してから、指導室かどうか

空いてる部屋に移動して話をしようか」

「あっ!!」

その時、俺は西村との約束を思い出した。

「な、なによシヨウ！おどかさないでよ！」

「どうした少年、突然叫んで」

「…放課後、ちょっと遅れても良いですか…？」

「なんだ？何か用事でも有るのか？」

不振そうな表情をする二人。

「ええと、俗に言う野暮用ってヤツが…」

「野暮用だと？なんだねそれは？」

「ええと、うーん…」

どうしようか…でも、隠しておいて後で遙にバレるとマズいしな。

「実は、今日西村への返事をする事になっていて…」

「あ！」遙が声を上げる。

「西村？どのクラスの？何の返事だ？」

由香里先生は何のことだか解らず混乱している。

「一年の西村亜里沙って知ってますか？」

「おう、次期ミス我が公の第一候補の亜里沙嬢だな？」

…やっぱ、考える事は誰でも大体一緒なんだな…

「シヨウが、亜里沙ちゃんからラブレター貰ったんです。

それで、返事するのが今日なのね？」

遙が話を引き継いで説明する。

「ああ、今日の放課後付き合うかどうかの返事をするんだ」

遙と先生が俺の顔をマジマジと見詰める。

「…そうか、解った。じゃあ職員室に来てもらうのは放課後、四時半で良いか？」

「はい、大丈夫です」

「あたしも大丈夫です。どうせ部活有るし」

「そうか、じゃあ芳野にもそう伝えておくから。」

…ところでな、イヤなら答えなくても良いんだが、西村亜里沙にはなんて返事するんだ？」

うつ！まだ全く考えていなかった…

「そうですね、どうしましょうか…？」

遥が俺の顔をじっと見詰めている。

「…まあいい、そう言う悩みは青春時代にしか出来ない贅沢な悩みだ。」

じつくりと考えるんだな。さて、遥、キミは何か言わなくて良いのか？」

「え！…だって、シヨウの事だから私が何か言う資格なんて無いし…」

にやっとする由香里先生。

「ほう、じゃあ資格が有れば言いたい事は有る、と」
カーッと赤くなる遥。

「さて、次の授業まではまだ時間が有るし、放課後までもまだしばらく有る。」

二人でしっかりと話合ってみれば答えは出るかもしれないな。

私は自習させてる連中の所に戻るから。ま、ごゆつくり」

由香里先生は色っぱいウインクを一つして出て行った。

取り残された俺達はチラチラとお互いを見詰め合う。

…いつたい、どうすりゃ良いんだこの空気…

誰か、知恵、いや勇気を俺に貸してくれ！

いや、他人も神様もこういう時に当てにしちゃいけない。

俺自信が答えを出して行動しなければ行けないと言う事をこの一年でイヤと言うほど学んだはずだ。

ふと見ると遥の目から涙が溢れている。

「どうした、遥！どこか痛むのか？」

焦って問い掛ける俺。

「…ううん、体はどこも痛くない。

でも、とても切ないの…なんでかな、シヨウの顔見ると…

シヨウの事考えてると…胸が痛い…」

遥は大粒の涙をポロポロと零している。

ガキの頃、遥とケンカして泣かした俺をぶっ飛ばしたオヤジがした説教を思い出す。

「いいか、男が絶対にしちゃならないのは、女の子を泣かす事だ！」
オヤジは遥を抱き上げてあやしなながら俺を叱った。

「男は女を守る事が仕事だ。よく覚えておけ」

俺はオヤジを、心から尊敬していた…そう、オヤジがこの世を去った今も。

よし！男は度胸！

「遥！話が有る」

「…え？」

「遥、俺は、お前を！」

お邪魔？

「遙、俺は！お前を！」

遙が俺の涙を浮かべたまま俺の瞳を正面から見詰める。

くそっ！中々口が動かねえ！

行け！俺！！

「俺は！お前の事がす」

ガラッ！！

「田中先生！怪我人です！！！」

ドタドタドタ！！

「きやあっ！」

「わああっ！！！」

俺と遙は比喻ではなく本当に二十センチほど飛び上がった。

飛び込んできたのは体育教師と体操服の女子一団。

先頭の体育教師に抱かかえられた生徒の頭から血が流れている。

「あれ？田中先生は？」

体育教師が俺に尋ねる。

「あ…今職員室に行つてると思います」

「そうか、みんな、僕は職員室に行ってくるから佐藤の事を見てくれ！」

体育教師はダツと保健室を出て行った。

何て間の悪さだ…っていうか、なんてお約束な展開だよ…

俺と遙は顔を見合わせて苦笑するしかない。

「あ！シヨウ先輩！」

その時、可愛い声が俺を呼んだ。

「お？あ！西村か」

そこには、ツインテールの可愛い娘が驚いた様に立っていた。

途端に、「きゃー！」とか「え！あの人の？」

と言った黄色い声が聞こえて来る。

「マジ？あの人がシヨウ先輩？」

でっかく目を開いて西村に詰め寄ってるのは頭から血イ流している佐藤何某だ。お前怪我人だろオイ…？

「どうしたんですか？先輩。具合でも悪いんですか？」

西村が俺に聞いてくる。

「い、いや、ちよつと遙が調子悪くてな…」

「え！あつ！若宮先輩！」

気付いてなかったのか西村…

ピピクうっ！！

遙の額に青筋が立つ。

あわわ、ちよつとマズいですよこれは…

「…あら、あたしの事はアウトオブ眼中だったのかしら西村亜里沙さん？」

的を狙って弓を引き絞る時の顔になる遙。

凜々しくて好きな表情だが、このシチュエーションではメチャ怖えよ。

「え…ご、ごめんなさい、そんな事無いです…」

驚き、脅えた様に俯く西村。

「おい遙、そんな言い方は無いだろう。西村、気にすんなよ。」

遙は今ちよつと体調悪くてブルーなんだよ」

「はい、ごめんなさい…」

俺は遙を見て、ちよつと怖い顔をする。

遙はアヒル口になってちよつと拗ねた様な表情を見せたが、

「…いえ、あたしこそ言い過ぎたわ。ごめんね西村さん」

と素直に謝った。

「いえ！とんでもないです。私こそすみませんでした」
慌ててお辞儀する西村。

ふう、焦ったぜ…それにしても良く遥が譲ってくれたな。

俺は思わず遥の頭を撫で撫でしてしまった。

「わああ…」「何か良い雰囲気よね…」

女子生徒から妙な咳きが漏れる。

「あなた達、そんな事より佐藤さんの手当てしなくていいの!？」

かあつと赤くなつた遥が一喝する。

「あ！忘れてた!」「濡れタオル濡れタオル!」「愛子大丈夫!？」

「私もうダメかもしれない!」「佐藤のポケっぷりに噴出す俺と遥。

そして、あたふたおろおろと騒ぎ出す女子一同。

仕方ねえな…

「遥」「ん。あたしは彼女の血を拭くから、アンタは包帯とか用意して」「りょーかい」

遥が洗面台でお湯を出して洗面器にため、タオルをお湯に付けて湿らす。

俺はその間に戸棚からガーゼと包帯、消毒薬等を取り出す。

「どの辺りから出血してるの…ん、ここね。もう殆ど止まってるわね。ちよつと我慢してね」

濡れタオルで傷口と流れた血を拭う遥。そろそろだな。

「遥。マキン持って来たからちよつと退いてくれ。」

佐藤ちゃん、ちよつと染みるぞ」

「はゝい、シヨウ先輩」

すつと退く遥と代わり、傷口周辺にタオルを当ててマキロンを吹き付ける。

「痛い!!」叫ぶ佐藤。

「え、そんなに染みたか?」

「違います、誰かが私の背中抓つたんです!」

佐藤が慌てて答える。

「はゝい、私見てましたあ。抓つたのは亜里沙でえす!」
ポニーテールの娘がしれつとチクる。

「西村、なんでそんな意地悪するんだ？」

「だって…愛子が…」しどろもどろになる亜里沙。

「愛子が、シヨウ先輩に優しくしてもらってるからヤキモチ焼いたんでしょ？」

ポニーの娘がニヤニヤしながら答えた。

「ちよつと！止めてよ！」

亜里沙が真っ赤になりながら大声を上げる。

その時、体育教師に連れられて田中先生が帰ってきた。いつの間にか佐藤の頭には綺麗に包帯が巻かれている。

「あら、ありがとう。誰がやってくれたの？」

「若宮先輩とシヨウ先輩です！」

佐藤が元氣一杯に答える。

「そうか、二人ともありがとう」

体育教師が俺たちに礼を言い、

「ほら、みんな行くぞ！田中先生、佐藤をお願いします」と言って保健室を出て行く。

亜里沙が保健室を出る時に振り返り、

「シヨウ先輩、放課後、待ってますから」

と俺を熱の籠った目でじつと見ながら言った。

少ししてから俺と遥は田中先生に礼を言っ保健室を出る。

まだ次の授業まで間が有るな…

「ねえ、シヨウ。さっき何て言おうとしたの？」

遥が悪戯っぽい表情で聞いてくる。

…とてもじゃないが、今なんて言えねえよ…

「ああ、また今度で良いや。ちゃんとしてからな」

「ふん、まあ良いわ」

ちよつと怒ったようになる遥。

「あ！今夜ってアンタバイト有るのよね？」

「ああ、ガスタのバイトだ」

「そうよね…明日はどう？」

「ああ、明日は大丈夫だけど」

ぱつと俺の前に回りこんで、

「ねえ、明日ウチにご飯食べに来なさいよ。」

ママが昨日の事を凄く気にして、お詫びしたいって」

「そんなの、気にしないでくれって言うつといて。」

でも、せつかくだからご馳走になりに行くよ」

にぱつと笑う遙。

「じゃあ、私も何か作ってあげるから！リクエストは？」

「そうだな。じゃあ、シチューが良いな」

「ん、期待しなさいよ！じゃあ、あたし教室戻るから。放課後ね！」

くるつと振り返り駆けて行く遙。

さて、俺は西村になんて返事をするか考えないとな。

泣かせないようにするにはどうすりゃ良いかな…

落着？

キンコンカーンコン...

さて、授業も終わりだ。

今日の放課後は大忙しだな...

「シヨウくん、昨日はごめんなさい...」

お、和泉か。

「ああ、もういいさ。今日、これから返事に行くよ」

「今日は隠れ聞きしないから、ごゆっくりね」

... ゆっくり、はしてられないけどな。

「じゃあ、行くわ。フォローよろしく」

「え！それって...」

絶句している和泉を残して俺は教室を出る。

はあ、気が重いな...

仕方ないとは言え、あんな可愛い子を泣かす可能性大かよ。

こりゃ、いつそ告白して振られる側の方が気楽なんじゃないか？

天国の親父、スマン。今日はアンタの教えを守れない、と思う...

さて、美術室だ。ノックして、と。

コンコン

「はい、どうぞ」

亜里沙の声が入室を促す。

ガラッと戸を開けて中に入る。

「やあ、お待たせ」

にっこりと微笑む亜里沙。

「先輩、今日はありがとうございました」

「うん、気にすんなよ。ところで佐藤は大丈夫か？」

「はい、大した事有りませんでした」

「そうか…」

少し、沈黙が流れる。

よし！男は度胸！

「西村、返事をさせてくれ」

「はい…」

俯く亜里沙。くそ、気も口も重えよ。

「…ごめん！俺はお前の気持ちに伝えられない！」

俺はバツと頭を下げ、心から謝った。

「…だと、思いました」

…え？

俺が頭を上げると、亜里沙はちよつと涙ぐんでいた。

「今日、保健室でシヨウ先輩と若宮先輩のやり取り見ていて解ったんです。」

二人は、凄く好きあっているんだなあ、って…」

亜里沙の頬に涙が流れる。

「今の私じゃ、二人の間に入る事は出来ないんだなあって…」

俺の中で罪悪感が増大する。

「だけど、若宮先輩は芳野先輩とお付き合いしているんですよね？」

それが不思議で仕方ないんです。どうして、なんでしょうね…」

俺は絶句してしまい、答えられない。

遥は本当に芳野先輩が好きで付き合いだしたんだろうか？

いやもちろん、嫌いななんて事は無いだろうが…

「だけど！私はまだシヨウ先輩を諦めたわけじゃありません！

だって、若宮先輩と芳野先輩が別れて、

シヨウ先輩と若宮先輩がお付き合いしない限り

私にもチャンスは有る筈だから！」

ポロポロと涙を零しながら微笑む亜里沙。

俺の胸がキュンと鳴った。

「だから、先輩、私を避けたりしないでくれると嬉しいです！ダメ、ですか…？」

「ここでダメ、なんて言えるヤツは男じゃない、よな…」

「お前を避けるなんてしないさ。」

俺は時間も金も無いから、あんまり遊んだりは出来ないけどな。

それで良ければ」

「はい！私ももっと頑張って先輩の心を奪って見せますから！

若宮先輩がモタモタしてたら、私が先越します！」

「ありがとう、亜里沙。俺もお前や遥に愛想付かされないように良い男になるよ」

「あはっ！亜里沙、って呼んでくれましたね！嬉しい…」

につこりと笑う亜里沙。とても良い表情だ。

「先輩、そう言えばバイク乗ってるんですね？」

「ああ、原付だけだな」

「私も今度原付免許取るうかと思ってるんです。

色々アドバースお願いできますか？」

「ああ、もちろん！聞きたい事が有ったら遠慮なく聞いてくれ」

「はい、ありがとうございます！よろしくお願いします！」

「じゃ、俺は行くね」「はい、さよなら先輩！」

そして俺は美術室を後にした。

時間は、四時十五分。ちょうど良い位だな。

俺は職員室へと向かう。廊下の角を曲がった時、遥と芳野先輩にバツタリ出会う。

「あ！シヨウ！」「お、遥と芳野先輩か」

芳野先輩は俺を見て、バツの悪そうな顔で目を逸らす。

「…行きましようか」遥の声で、三人揃って職員室へ向かう。

ノックをしてから職員室へ入ると、由香里先生が

「おう、三人揃って来たかね。ちょっと待っててくれたまえ」と声を掛けてきた。

五分程の後、由香里先生に伴われて指導室に入る。

「さて、それではまず芳野から今日の昼に有った事を聞かせてくれ。

あ、シヨウと遥は何か言いたい事有っても黙っててな」

先生に促され、芳野先輩がぼつぼつと話始めた。

内容は、大体事実を包み隠さずに表現していて、

また、なぜ遥の事を無理に引っ張って行ったんだという先生の問いに、

「…シヨウに対して、ヤキモチを焼いていたんだと思います」

と正直に答えた。

また、遥に対して女々しい事をしてしまつて悪かつた、と謝り、俺にも八つ当たりして済まなかつた、と謝ってくれた。

やつぱ、芳野先輩も良い男だよなあ…

遥も何度も謝る芳野先輩に

「もう良いよ、博隆」と優しい視線を向けている。

…なんだが、胸の奥がチクツと痛むが、それじゃ俺がヤキモチ焼いてることになるな…

「ん、まあ丸く収まつたな。じゃあ今日はこれで解散にしようか！」

由香里先生の言葉でお開きとなり、俺達は指導室から出た。

「じゃあ、私達は部活に戻るから」

「ああ、それじゃ。芳野先輩、お先です」

「ああ、バイト頑張れよ」

「じゃあシヨウ、明日ね」

「うん、お先！」

俺は二人と別れ、自転車置き場に向かった。

自転車の力ギを外していると、「シヨウくん！」と声が掛かる。

「ん？あ、亜由美か」

振り向くとそこには亜由美が微笑みながら立っていた。

指切り？

につこりと笑いながら近付いてくる亜由美。

「ねえ、シヨウくん、忘れ物してない？」

…あっ！！

「ごめん、亜由美。弁当箱洗ったのに教室忘れちゃった。取ってくる」

一瞬ポカンとしてからあはは、と笑い出す亜由美。

「そんなの明日でいいよ！忘れ物って、遥ちゃんの事よ！

何が有ったの？解決したの？」

ああ、それか！まあそっちも忘れてたけど…

「…と言う訳で、丸く収まったんだ」

亜由美を後ろに乗せて走りながら、遥と俺の一件を外して亜由美に説明した。

「なるほどね、あの芳野先輩でも遥ちゃんの事になると嫉妬に狂うのね」

「ああ、男つてのはやっぱり惚れた女の前じゃ弱いよな」

偉そうに、人事の様に言う俺。

「…じゃあ、シヨウくんも好きな娘の前じゃ弱いのか？」

なんか意味深な事を言ってくる亜由美。

「…そうだな、弱いかもしれないな。まだ解んないよ」

突然、亜由美が俺の耳元に口を近づけて囁いた。

「ねえ、シヨウくんの好きな娘って誰？」

うわっ！びつくりした！

「ななな何をいきなり言うんだよお前は！」

「ねえ、私に隠してる事無い？」

色っぽく呟く亜由美。

一体、何を言わせたいんだコイツ…

「黙秘なの？じゃあ、私が言ってあげる」

！な、何を言うんだ…遥の事か？

「一年の西村さんに告白されたんでしょ？」

その事が…ふう。って、

「何で知ってるんだ!？」

俺の首に手を廻し、ぎゅっとくっ付いてくる亜由美。

…おい、肩から背中に掛けて感じるこのやーらかい感触は…!!

「んふふ、ひ・み・つ」

ちよつと、ちよつとちよつとお！

や、やばい…危険だぞコレは。特に体の一部が過敏に反応している！

「お、おい亜由美！あんまりくっ付くな！」

「何でえ？私の胸がぎゅってしてるだけじゃない」

うふふうと笑う亜由美。耳に亜由美の暖かい息が掛かる。

ワザとやってんのかコイツ!!

「だーっ！気が散って危ないだろうが！このまま俺と心中する気があつー！」

すいつと離れる亜由美。ふうう…

「それは流石にイヤだから勘弁して上げる。

そうそう、シヨウくんお弁当どうだった？」

「あ、ああ、凄く美味かったぜ。特に唐揚げ」

「そう、良かった！で、メッセージはどうだった？」

…ああ、アレな。

「お前アレはちよつとふざけ過ぎだろう。アレを教室で開けてたらちよつとしたパニックになってたと思うぞ。

大体、ミス我が校のお前と遥で、遥は彼氏出来ちまったからフリーのお前の人気がうなぎ上りな事を忘れるなよな。

俺を殺したいんなら効果的かもしれないが」

「…ふ、ん、冗談だと思ったんだ…」

…え？

いきなりむぎゅつと首を絞める亜由美。

「ぐえっ！！止める止める苦しいって危ねえって！！」

「シヨウくんのバカ！」

ところで、西村さんには何て答えたの？」

…なんでバカって言われたんだ、俺？

つと、西村への答えか、

「…えーと、それはな…」

遥と俺の事を抜いて、亜里沙との顛末を話した。

「と言う事は、西村さんはまだシヨウくんを諦めてない訳ね」

「まあ、でもきつと直ぐに他のカツコいい男に目が行くだろ。

大体、俺みたいなカツコ悪くて貧乏で成績も悪いモテないヤツにあんな可愛いコが告白してくるなんて、三年分くらいの運を

一気に使い果たした気がして恐えよ」

あはははは！…と俺だけが笑う。

あれ？亜由美も「そうよね！」とか言って笑うと思ったのにな？

「どうした、亜由美。黙っちゃって？笑う所だぞ？」

「…んーん、何でも無い…」

突然黙ってしまった亜由美。な、なんだこの重い空気は…

「そ、そろそろお前の家だな。今日は弁当ありがとうな」

黙っている亜由美。あの角を曲がれば亜由美の家だ。

「…ねえ、シヨウくん。今夜バイトだよね？」

「ああ、そうだけど」

「今日、ちよつと家に帰りたくないの。バイトが終わるまでで良いから、

シヨウくんの部屋に居させてくれないかな？」

亜由美の様子が変だな…

「ああ、別に構わないが、散らかってるぞ？」

それに、一応おばさんには言っておいた方が良いんじゃないか？」
少し間を置いて、

「そうだね、じゃあちよつと家に寄つてくれる？」

と答える亜由美。

俺は角を曲がり、亜由美の家の玄関のちよつと手前で自転車を停めた。

「ちよつと待つてね」

亜由美はカバンを持つとタタつと駆けて行く。

五分ほどすると私服に着替えた亜由美がポシエットを持って戻つて来た。

「お待たせ！ ショウくん。じゃあ、お願いね！」

…よかった、いつもの亜由美に戻っている。

俺は亜由美を乗せると、再び自転車を漕いで自分の部屋へと向かった。

自転車をドアの横に停め、カギを開けて部屋に入る。

「散らかつてるのは勘弁してくれよ」

「わーい、お邪魔しまーす！」

なんだかはしゃいでいる亜由美。

最近、遙が合鍵で入ってくるからアレな本とかビデオは秘密の場所に隠して有るからその件については安心だ。

「結構良い部屋ね！ こっちの部屋は何？」

「ああ、そこは前住んでた家から持ってきた荷物が入った物置になつてる。

まあ、なんとか一人位寝られるスペースは有るけどな」

「開けても良い？」

「別に構わないよ」

ガラツと引き戸を開ける亜由美。

「…凄いね、一杯になつてる。でも、コレはショウくんの大切な宝物なんだよね」

「…ん、まあガラクタなんだけどな」

「って、ショウくん！ 部屋の中におっきなバイクが置いてあるんだ

けどっ!!」

「ああ、親父の形見なんだ」

そこには、親父が生前乗っていたバイク、スズキ・GSX750Sカタナが静かに眠っていた。

親父は、本当は前に乗っていた1100のカタナを持っていたかったんだが、

家族みんなで出掛けるのに大きい車が欲しいから、と1100カタナを売って

頭金にしてハイエースワゴンを買った。

その後、お袋がへそくりで親父に買ってあげたのがこの750カタナだ。

排気量以外は1100も750もほぼ一緒のこのバイクだが、値段は一ケタ違う。

だが、親父は大喜びして買ってもらった750カタナを大切にしていた。

限定解除という凄まじい難関を突破しなければ乗れないので今は置物と化しているが、

いつか必ず俺はこの750カタナに乗ってやる…

いかん、いつの間にか熱くなって亜由美に語ってしまっていた。

こんな話、女の子にはつまらないよな。

「んん、そんな事ないよ!とつても楽しかったし、なんか凄く感動しちゃった」

亜由美の瞳に涙が溜まっている。

「ねえ、免許取ってこのカタナに乗れる様になったら、一番先に私を後ろに乗せてね!」

「…悪い、亜由美。一番乗りは先客が居るんだ」

「解った!遥ちゃんね?」

ちよつと頬を膨らませる亜由美。

「ご名答。二番目じゃダメかな？」

「じゃあ、私を乗せて軽井沢まで連れてって！」

亜由美はビツと軽井沢の方向を指しながら声を上げた。

「ああ、良いぜ！つつつても、何年先になるか解らないけどな」

「うー。じゃあ、その前にもつと小さなバイクで良いから！」

なんでそんなに軽井沢に拘るんだ？まあ、良いか。

「じゃあ中免取ったら行こうか！」

「うん！行くー！」

亜由美が小指を差し出す。

「指切りして！」

ゆーびきりげんまーん、嘘ついたーらはーり千本のーます！

「おっと、バイト行かなきゃ！じゃあ適当にしててくれな」

「はーい、いつてらっしやい！」

俺は亜由美の声に送り出されてバイトへと向かった。

迂闊？

バイトが終ったのは午後十時、今日は意外とヒマだったな。
DT50を飛ばして部屋に帰る。

亜由美、まだ居るかな？途中で弁当でも買っついこうかと思ったが、
亜由美がまだ居るのならどこかに食べに出ても良いかと思い
とりあえず何も買わずに帰る。弁当のお礼もしないとな。
アパートに着くと、俺の部屋に電気が点いている。
うん、まだ居るみたいだ。

「ただいま」

自分の部屋に入るのにただいま、なんて言うの違和感が有るな。
というか、なんか久し振りだな、こう言うの。

「お帰りなさい！」

ドアが開き、亜由美が嬉しそうに顔を出す。

結婚すると、こんな感じなのかな：

ふとそんな事を考えてかあつと顔が熱くなる。

いかんいかん、何考えてるんだ俺は！

「どうしたの？シヨウくん。突然頭ぶんぶん振って？」

亜由美が不思議そうな顔をする。

「あ、なんでもない。気にしないでくれ」

慌てて答える俺。

って、何か部屋の中から凄くいい匂いがしてくるな。

「亜由美、メシ食ったか？」

「ううん、まだ」

「どっか、食べに行こうか？弁当のお礼に奢るよ」

突然亜由美がにこーっと笑う。

「えへへー、まあこつち来てよシヨウくん！」

俺の手を握り、部屋の中に引っ張る亜由美。

「な、なんだよ。どうした…って、うおおお！」

俺は部屋の中に入り、思わず歓声を上げてしまった。

部屋のテーブルの上には、美味そうな食事の支度が出来ていた！

鶏の唐揚げ、鳥のササミのサラダ、肉じゃが、ジャガイモとワカメの味噌汁…

俺の大好物ばつかじゃん！！

「これ、亜由美が作ったのか？」

「へへへー、そうです！ね、嬉しい？」

俺はマジ感動していた。

「ああ、凄く嬉しい。ありがとう亜由美！」

「うふふ、ちょうど出来た所だから熱々だよ！

冷めない内に召し上がれ！」

俺と亜由美はテーブルに着き、「いただきます！」と叫んで食べ始めた。

「…んまい！！」

思わず叫ぶ俺。

「わあ、嬉しいな！どんどん食べてね！」

「もちろん！むぐむぐむぐ…」

夢中で食べる俺を嬉しそうに見詰める亜由美。

めちやくちや腹が減ってたのもあり、俺はあっという間に三杯飯で

おかずをほとんど食べ尽くしてしまった。

「ご馳走様！あゝ、美味かったあ」

いつの間にかお茶を淹れてくれている亜由美。

お茶を飲みながら、俺は心の底から、

「亜由美、お前本当に良い奥さんになれるなあ。

美人で、優しくて、料理が美味くて、良く気がつく。

うん、最高のお嫁さんだ！」

と思い、何も考えずにそのまま言葉にした。

「えゝ、それ褒めすぎだよ。お世辞でしょ？」

「いやマジで！ホント、俺がお前に吊り合える位の男だったら
プロポーズ
絶対求婚しちまうけどな」

思わず口をついて出た言葉に、まさか亜由美があんな反応をするとは。

俺は夢にも思わなかったとも。ああ。思わなかったさ……

ただ今午前六時。

なんで俺はこんな所で朝を迎えているんだろう…

ベッドの上に寝転んだ状態で、痛む左腕を動かしてみる。

包帯とギプスで固められた左腕がまともに動くようになるには
一ヶ月は掛かると言われてしまった。

しかし、それ以上に痛いのは泣きじゃくる遙に引つ叩かれた左頬と、
遙の言った言葉…「待ってたのに！！」

最悪だな、俺…

不可抗力とは言え、遙と亜由美。大切な二人の少女を泣かせてしま
った…

親父、俺は現在^{いま}、最低な男に成り下がっちゃったよ…。

さて、どうした物だろうか、この事態。

あと二時間程でみんながやって来て事情聴取になるだろうな。

担任の浅井先生も来るし、由香里先生も来るらしいし…

なんかもう、死にたくなってきたよ…

いっそ、大地震でも起こってくれないかな…

はあ………

衝撃！？

午前七時、朝食の配膳が始まる。

俺の所にも看護婦さんが食事の乗ったトレイを届けてくれた。

そう、俺は今病院に要る。

左手にはヒビが入り、右足は酷い打撲で歩けない。

「シヨウくん、一人でごはん食べられる？」

看護婦さんが優しく聞いてくれる。

「はい、大丈夫です」

どうせ、食欲なんか無いしな…

なんでこんなことになっちまったのか、

もう一度昨晚の出来事を整理してみる。

あれは、俺の迂闊な一言から始まったんだっけ…

「いやマジで！ホント、俺がお前に吊り合える位の男だったら
プロポーズ

絶対求婚しちまうけどな」

亜由美の作ってくれた食事の美味さに興奮した俺は、

最大級の賛辞の積りで亜由美にそんな言葉を言った。

その時、お茶を入れていた亜由美の手がピタ、と止まった。

「…ホント？」

俺はお茶を啜りながらのほほんと言う。

「ああ、ホントさ！だけど、残念ながら俺程度の男じゃ

とてもお前の相手は務まらない」

「絶対に！ホントなのね！！」

俺の言葉を遮り大声を上げる亜由美。

思わず呆気にとられる俺。

「…どうしたんだ？亜由美。そんな大声出して」

亜由美の瞳から大粒の涙が零れだす。

「！おい、亜由美、どうしたんだ？何で泣いてるんだ？」

顔を掌で覆い、泣き出した亜由美。

俺はどうしようも出来ずおろおろするばかりだ。

「シヨウくんって、残酷だよ…！」

な、何がだ！？意味が解らないぞ！

「だって、だって…！そうやってすぐにトボけて！

私が、どれだけシヨウくんの事を好きなのか気付きもしないで！

ずっと、ずっとシヨウくんの事好きだったんだよ！」

…ええ！？

「それって、小学校の頃だろ？」

「…気付いてたの？あの頃」

やべえ！墓穴掘ったか？

まさか最近遥に聞いて知つたなんて言えないしな…

「さ、最近あの頃の友達から聞いたんだよ。お前が俺の事好きだったって」

「遥ちゃんから聞いたのね…」

三秒でバレた。なんてこつた。

「シヨウくんは嘘つきじゃないよね…」

真つ赤な目をした亜由美がすくつと立ち上がった。

「ねえ、さっき言つたよね。私をお嫁さんにしたいって」

ちよつと待てえっ…！！

「アレはだな、お前の料理が凄く美味かったから、いい嫁さんになるなって」

「ごまかさないでっ！だって、その後言つたじゃない！

俺だったらプロポーズしちまうって…！」

普段はほんわかした雰囲気の亜由美が物凄え恐い。

「だ、だからあれは、もし俺がお前に見合つほどの男だったらの話で」

「ショウくんは私なんかには勿体無い男の子だよ！

だから、私をお嫁さんにしてよっ！嘘はつかないよね！？」

亜由美の目が完全に据わってやがる。

「ど、どうしたんだよ亜由美！なんかおかしいぞお前！」

「もうやだ。もうこんな気持ちでよくよしてるのやだもんっ！」

亜由美がいきなり服を脱ぎ出した。

「でええっ！待て！亜由美！早まるな！！」

ブラウスを脱ぎ捨てる亜由美。可愛らしいピンクのブラがこんにはは。

…やっぱ、なかなか胸有るな亜由美。

って、そんな場合じゃねえよ俺っ！！

俺が内面世界で右往左往している内に

インナーワールド

無情にもスカートがハラリと床に落ち、ブラとおそろのピンクのショーツがこんにちは。

ウエストは細くていい感じにくびれている。お尻は大きめで安産型だな。

だああ！ヤベえ俺！錯乱してるよ混乱してるよ！！

「亜由美いつ！！止めろってえ！！」

手を後ろに廻し、ブラのホックを外そうとしている亜由美を止めようとして

亜由美に向かってダッシュを掛ける俺。

しかし、焦った俺は亜由美と俺の間に有るテーブルの存在を失念していた。

どがらっしゃあああああ！！

物凄い勢いでテーブルに蹴躓き、テーブルをひっくり返しながら宙を舞う俺。

スローモーションで近付いてくるのは、赤い目をしたびっくり顔の亜由美。

いや、逆だ。俺が亜由美に近付いて行ってる。

そう、空中をウルトラマ の様に飛びながら。

俺の顔は亜由美の胸に飛び込んでいく。そのまま、亜由美を押し倒しながら床に転がる。

そこには、ふたつ折りにしてたたんで有る布団が有った。

勢い余って布団に突っ込む俺達。

またうまい具合に布団がざーっと滑りつつ床に広がった。

どざーっ！！

「きゃああああ！！」

「痛ってえええ！！」

スローモーションが終った時、俺は亜由美の胸に顔を押し付けながらぶっ倒れていた。

しかも、その勢いで亜由美のブラと胸の間に顔を挟むようにして、だ。

「何いまの凄い音！！どうしたのショウ！！」

ガチャガチャ！！バンッ！！

遙の声が聞えると同時にカギが開きドアも開き、遙が部屋に踊りこんできた！様だ。

なにいつ！！と顔を上げようとした俺の頭には亜由美のブラが引っ掛かっており、

ガバツと頭を上げた瞬間にブラのホックがブチン！と音を立てて弾けた。

そして頭を上げ、ドアの方を向いた俺の目には啞然と立ち尽くす遙と見知らぬおっさんが映った。

「な、何やってんのよバカショウっ！！」

我に返った遙が鬼の様な表情で叫ぶ。

「お、落ちけつ遙！」俺が落ち着け。

「コレは不可抗力だ！ワケが有るんだ！！」

「ふざけんなあつ！ブラ頭に被って何やってたのよ！！」

ハツと気付き、頭に手をやると亜由美の可愛らしいブラをしっかりと被っている俺。

急いで外そうとするがどこかに引つ掛かっていて外れない！

「このガキいつ！よくも亜由美の純潔をおっ！！」

見知らぬおっさんが吼えながら俺に向かってくる。

なんだ、誰だ、どうしたってんだ！！

「止めてよパパっ！」

亜由美が叫ぶ。って、パパあつ！？

お父様でいらっしやいますか。娘さんにはいつもお世話に…それどころじゃネエだろ俺っ！

良く見るとお父様の手にはマグライトのでかいのが握られている。

それ、警棒としても使われるんですがネ？

あつという間に距離を詰めて俺にマグライトを振り下ろすお父様。

あんなモノを頭に直撃食らったらマジ死ぬわ！

咄嗟に横にかわそうとする俺。その時、さっきテーブルでしこたま打ち付けた右足が

ズッキーンと痛みやがった。交わすのが遅れたあつ！！

両手を上げ、頭を庇う俺。

ガッ！！

左腕に鈍い痛みと痺れが走り、ひっくり返る俺。

「痛っ！！」

俺の後ろにはショーツだけとなった亜由美が居た。

「貴様あつ！亜由美から離れろ！卑怯者っ！！」

「おじさん！シヨウに何すんのよ！止めてよっ！！」

お父様を羽交い絞めにする遙。

「そうよパパのバカっ！！私はシヨウくんのお嫁さんになるんだからあっ！！」

… あっ。 亜由美さん。 貴女ね。 もうね。 火に油、 っ て知ってる？

戸惑い…？

「ショウくん、ご飯全然食べてないじゃない」
看護婦さんが溜息を付く。

はつと我に帰る俺。

「すみません、頭が痛くて…」

俺の頭には包帯がぐるぐる巻きにされている。

「あら、大丈夫？痛み止めの注射しておく？」

心配そうな顔で聞いてくれるが、

「いいえ、我慢します。みんなが来た時に寝てるのもなんだし」

「そう…無理しちゃダメよ。我慢できなくなったら直ぐに言ってね」

「はい、ありがとうございます」

そう、さっきから痛み止めが切れたのか頭の傷が疼き出した。

俺はまた、昨夜の事件の回想に入っていた…

後ろから亜由美が俺にぎゅっと抱き付く。

「ななななな…！！」

絶句するお父様。そりゃそうだな。

ぶんっ！！

「おわっ！？」

突然お父様が横に吹っ飛び、キッチンの床に転がる。

「ショウ！！どういう事なのよっ！！」

お父様を力任せに投げ捨てた遥がダッシュで俺に飛びつき、
襟首を捻り上げながら叫ぶ。

遥の顔と俺の顔は数センチの至近距離。

遥の大声で耳がキーンとなってしまう。

と、遥の瞳から大粒の涙がぽろぽろと零れ出した。

「待ってたのに…！」

「…え？」

「あんたの言葉、待ってたのにつ！！」

遙は叫ぶと同時に俺の頬を引っ叩いた。

びったーん！！

物凄い衝撃と共に俺の視界に星が舞う。

「ショウくん！大丈夫！？ 止めて！遙ちゃん！私のショウくんを打たないで！！」

遙の顔が夜叉の様な表情になる。

俺に抱き付いている亜由美の身にはショーツしか付いてない。

豊かな胸は俺の背中にむぎゅっと押し付けられ、

真っ赤になって泣いている可愛らしい顔は俺の顔の右にぴったりとくっ付いている。

ダメだ。今何を言おうとも、ただの言い訳にしか聞こえないだろう。

「亜由美を返せえええ！！」

突然響いた声に驚き、そちらを見た瞬間。

ガッン！と鈍い音が俺の脳内に響き、目の前に火花が散った。

口と鼻の中に熱い感触が広がり、目の前が真っ赤になる。

あ、マグライトで殴られたんだな、と妙に冷静に分析しつつ、俺の意識は闇に沈んでいった…

ふと目を開くと、

そこには見知らぬ天井。

「お兄ちゃん！大丈夫！？」

可愛い声が聞こえる。と同時に物凄い頭痛が俺を襲う。

「うつ！」痛みをこらえながら声のした方を向くと、

そこには半泣きになった沙里とベッドに突っ伏して眠っている加奈の姿が有った。

「沙里、か…ここは、どこだい？」

「良かった…ここは病院だよ。どこか痛くない？」

「ああ、頭がかなり、な」

俺が答えると「ちょっと待っててね！」

と答え、急いで駆け出していく沙里。

一体何が有ったんだろう…今日は何日だ？今、何時なんだ…？

「シヨウくん、気が付いたのね！」

ドアが開き、看護婦さんと一緒におばさんが入ってきた。

「よかった…一時は意識不明になってたから、もう…」

そこまですうとおばさんは両手で顔を覆い、泣き出してしまった。

「おばさん、泣かないで…」

俺も困ってしまう。

「シヨウくん、気分はどう？頭はどんな風に痛いの？」

看護婦さんが聞いてくる。

「あ、心臓の音と一緒にズキズキと割れるみたいに痛いです」

「そう。今、痛み止めの注射を用意するからちよつと待っててね」

看護婦さんが病室を出て行く。

すると、看護婦さんと入れ替わる様に顔をちよつと背けて

俺と目を合わさない様にした遥が病室に入ってきた。

「遥…」

「頭は、大丈夫なの？」

…なんだか、気でも狂っちゃったかのような聞き方にちよつと苦笑

いしてしまう俺。

「ああ、なんとかな。ところで、俺はやっぱ亜由美のお父さんに殴

られたのか？」

「ええ、黒い大きな懐中電灯でね。物凄く血が出てホントに驚いた

んだから…」

目を逸らしたまま答える遥。

その時、看護婦さんが注射を持って帰ってきた。

「さあ、痛み止めの注射をしますよ。睡眠効果も有るからすぐに眠

くなると思うわ」

看護婦さんの言葉を聴き、おばさんが涙で真っ赤になった目を俺に向ける。

「シヨウくん、じゃあ明日の朝また来るわ。」

担任の浅井先生と、遥や亜由美ちゃんの担任の河合先生も来られるそうだから安心して」

うゝむ、何を安心すれば良いのだろうか…？

「あと亜由美ちゃんとお父さんも来ると思うけど、怒らないでね…」
おばさんが目を伏せて呟く様に言う。

「とにかく、明日ちゃんと話しましょう。じゃあ、私たちは帰るから。お休み、シヨウくん」

「ありがとうございました。お休みなさい」

おばさんは眠ったままの香奈を抱き上げて病室を出て行った。

沙里と遥もそれに続く。

遥が病室を出るとき、ふつと俺の方を向いて、

「あたし、待ってたんだから…」

と言い、涙を流しながらたつと出て行く。

「待ってた、って何を…？」

食事に行くのは明日の夜ハズだし、今夜遥となにか約束してた覚えは無いんだけどな…

注射が効いてきたのか、俺は遥の言葉に対する疑問を考えながら眠ってしまった。

現況認識？

昨夜の事を思い出すと、遥の言葉の意味がなおさら解らなくなる。一体、遥は何を待っていたと言っのだろう。いくら考えても解らない。

うーん…

コンコン

誰か来たな。

「シヨウくん、入るわよ」

遥のおばさんか。

「おはよう、シヨウくん。良く眠れた？」

「うん、なんとか。」

「怪我の方はどうなの？」

心配そうな顔をするおばさん。

「うん、大丈夫だと思う。まだちよつと痛むけどね」

その時、半泣きの亜由美が入ってきた。

「シヨウくん…ごめんね、私のせいで…」

亜由美はポロポロと涙を零している。

「ああ、大丈夫だから気にすんなよ」

俺の言葉は本当だ。

俺がもつと亜由美の気持ちを考えて喋れば、

亜由美だってあんなに取り乱したりしなかつたはずだ。

「パパはまだ警察に居るから、後でまた謝りに来るわ。

代わりに、パパの奥さんが来てるんだけど入れても良い？」

…なんだ？パパの奥さんって。お母さんって事だろ？

「あのね、亜由美ちゃんのお父様は昨年再婚なさったの。」

だから、今日は亜由美ちゃんのお義母様がいらっしゃってるの」

「止めておばさん！私のお義母さんじゃなくて、パパの奥さんだからっ！」

亜由美が叫ぶ。

そうか、最近の亜由美の様子がおかしかったのは、お父さんの再婚のせいかな。

「亜由美、せっかくお見舞いに来てくれたんなら入ってもらってよ。俺は亜由美に優しく言う。」

「……じゃあ、呼ぶからちょっと待ってね」

亜由美はそう言っていると、部屋を出て行った。

「おばさん、遥は？」

「亜由美ちゃんのお義母さんと一緒に待合室で待ってる。」

シヨウくん、遥と何か有ったの？

昨夜は、シヨウくんの為にシチュー作るんだってとても張り切っていたのよ」

「……俺にもよく解らないんだけど、昨晚の事件が原因だとは思うんだ」

おばさんはちよつと首を傾げ、

「そうね、まあ多分ヤキモチでしょうけど」と言って苦笑した。

「ヤキモチ？」何が？誰に？……って、ああ！

「やっと解ったのね？そう、あなたと亜由美ちゃんによ。」

ここだけの話だけど、遥はシヨウくんの事好きなのよ。

だけど、芳野くんと成り行きみたいな感じで付き合いたしたからシヨウくんへの恋心は自分でも知らない内に封印してたんでしょね。

だけど、シヨウくんが一年生の娘に告白されたり、

一昨日、芳野くんが来てシヨウくんの事忘れてしまった時の後悔の念なんかで

自分の気持ちにやっと気付いたんでしょ」

「まあ、俺も似たようなタイミングで自分の気持ちに気付いたんだけど。」

「そのタイミングで昨晚の事件が起こって、遥は自分でも何が何だか解らない位

大混乱しているんだと思うわ。だから、遥の事許してやってね」

なるほど… あっ…！

「解ったあ…！」

俺は大声で叫んだ。

「きゃっ！？どうしたのシヨウくん？」

突然叫んだ俺におばさんが驚いている。

「あ、ごめんなさい。何でもないです」

おばさんに謝る俺。

「…そうか！遥が待っていた「言葉」ってのは、俺からの告白だ！

あの時、保健室で言おうとした言葉…！」

邪魔が入って先延ばしになったけど、きっとあの言葉を待っていたんだろう。

だから、俺と亜由美との事を誤解してあんな事を口走ったんだろう。

「何が解ったんだ？少年」

突然響いた声に驚いて部屋の入り口を見ると、花を持った由香里先生と

俺の担任の浅井先生、そして遥に亜由美に見知らぬ女性が入ってきた所だった。

「おはよう、シヨウ、怪我の具合はどうだい？」

由香里先生がのほほんとした声で挨拶する。

「災難だったようだな。大体の事情は聞いている」

担任の浅井先生も心配そうに聞いて来る。

「はい、ご心配掛けて住みませんでした、」

俺は二人の先生にお辞儀する。

「ほれ、亜由美、シヨウにお義母さんを紹介したまえ」

由香里先生に促され、亜由美がしぶしぶといった感じで紹介を始めた。

「…シヨウくん、この女性ひとはパパの新しい奥さんのまどかさん」

ウェーブの掛かった長い黒髪の美女が深々とお辞儀をした。

「はじめまして、私は南の家内のまどかです。」

この度は主人がとんでもない事をしてしまいまして真に申し訳有りませんでした…」

心の籠ったお詫びに、俺はちょっと慌ててた。

「いえ、まあ大した事…は有りましたが、お気になさらない様にしてお下さい」

まどかさんが頭を上げる。

かなり若い女性だ。おそらく、まだ二十台か、少なくとも三十台前半だろう。

「主人も早まった事をしてしまったと大変後悔し、反省しております。」

また後ほど三人でお邪魔しますので、よろしくお願いいたします」
もう一度深々と頭を下げる。

「ええ、お待ちしてます」

「もうお詫びは済んだんでしょ。じゃあ帰って下さい」

亜由美が冷たく言い放つ。

「ええ、亜由美ちゃんは…」

「私の事は放っておいて下さい。構わないで！」

「…じゃあ、私は警察に行きます。気をつけて帰ってきてね」

出て行くまどかさんに返事もせず亜由美はそっぽを向いた。

「…さて、複雑な家庭の事情を目的の当たりにした所でなんだが、

とりあえずシヨウくん、何故キミが入院するハメになったか理解

出来てるかね？」

「なんとなく、ですけどね。幾つもの誤解とバッドタイミングが最悪の方向へ働いたってトコでしょうか？」

くくく、っと笑う由香里先生。

「さすが、苦労しているだけあって既に高校生とは思えないほど大人びているなキミは。」

そう、その通りだ。まあ、ここにいる関係者の理解を深める為にも私が聞き込んだ状況推測結果を披露しましょうか」

：俺が亜由美を家まで送り、再び亜由美と一緒に家を出た時、家にはまだ亜由美のお父さんは帰ってきておらずまどかさんしか居なかった。

まどかさんに行き先を聞かれた亜由美は「ほつといて！」と怒鳴り飛び出す。

それを追ったまどかさんは俺の自転車に乗って去って行く亜由美を見た。

そして亜由美は俺の部屋で食事を作って俺を待ち、帰ってきてから一緒に食べ、

その後に俺の不用意な発言により大胆な行動に出てしまった。

その頃、帰宅した亜由美のお父さんはまどかさんから経緯を聞き、とりあえず亜由美を待ってみたが十一時を過ぎても帰って来ない。

余りにも遅い帰りに心配が高じて心当たりの友達としてまず遙に連絡し事情を話した。

遙は亜由美を自転車に乗せて去った少年の事を聞き、もしかしてシヨウではないかと思い

遙の家にやってきた亜由美の父さんと俺の部屋へ来て、

俺がテーブルに蹴躓いて立てた音に驚いて合鍵で入ると

そこには半裸の亜由美に申し掛かっている俺が居た、と。

亜由美の父はあられもない姿の愛娘を押し倒している俺に激怒し、すったもんだの末左手と頭部に大型のマグライトを振り下ろし、

左腕の骨にヒビを入れ、脳挫傷一步手前の怪我を負わせた…

「で、なぜ亜由美が半裸でシヨウに押し倒されていたかは亜由美本人から説明有り、と。

以上でシヨウくん殺害未遂事件のあらすじは終了だが、何か質問の有る人は？」

もちろん、誰も手を挙げない。

と、おずおずと手を挙げたのはこの俺自信だった。

「え」と、さつき亜由美のお父さんが警察に居るって言うてましたが、

なんで未だに警察に居るんですか？」

「うん、それはだな」浅井先生が答える。

「いくら誤解やら何やらが有ったとは言え、アメリカでは持ち運びに規制すら有る様な、

またアメリカンポリスが正式に警棒として採用している様な大きなマグライトで

未成年の腕にヒビを入れ、更に頭部挫傷まで負わせてしまったかな。

これでは間違いなく傷害だし、縁起でも無いが、もしシヨウが死にでもしたら

過失ではない殺人だからな。警察も放って置く訳には行かんさ」

「なるほど…」

まあ確かに痛かったからな。腕も頭も…そして心も。

「シヨウくん、治療代とかは南さん持ちになるって事だからね」

おばさんが優しく言うてくれる。

確かに俺は、治療費を払えるだろうかってのが懸念だったから安心する。

「当然です！ちゃんと慰謝料も払わせるから安心してねシヨウくん」
亜由美がいつの間にか俺のベッドに腰掛けながら俺をじっと見てい

る。

遙は入ってきてから一言も口を利かずに窓の外を眺めている。

それにしても、これからどうするかね…

大好き！

病室に居る全員が口を閉じ、少しの間沈黙が流れた。

と、ノックの後にドアを開けて医者^{せんせい}が入ってきた。

医者はおばさんと学校の先生二人に挨拶をし、俺の怪我の具合を診てくれた。

そして、今朝時点での容態説明を始めた。

「うん、とりあえず頭部の精密検査結果待ちだが多分大丈夫だろう。腕は昨晚も話したとおり完治には一ヶ月掛かるが後遺症はないと思う。」

足の打撲は酷い事は酷いがただの打撲なので心配は要らない。「俺を含むその場の全員がほっと胸を撫で下ろす。」

ただ、頭の怪我が気になるので念の為今週一杯入院してもらう、と言われてしまった。

医者の説明を聞いた由香里先生は、

「まあ、今日は本当に大人しくしてなさい。」

亜由美は後でお父さんと奥さんがまた来るだろうから、その時に一緒に来るなら

今日はまあ、学校は安みって事にしておく。

若宮さんのお母さんは、保護者の代わりに付き添って下さるんですね？」

と聞いてきた。

「はい、シヨウくんの付き添いは私がやりますのでお任せください」「それでは、お願いします。」

じゃあ、亜由美とりあえず帰ろうか。家まで送っていくから」「え！と驚く亜由美。

「私、パパ達来るまでシヨウくんについています」

「いや、それは若宮さんがやってくれるそうだから大丈夫。」

とりあえずキミも一度帰りたまえ」

亜由美は何か言いたそうに口をもごもごさせたが、由香里先生の目を見て諦めたように「…はい」と俯いた。

「じゃあ、行きましようか浅井先生。それでは若宮さん、お願いします」

「はい、お任せください」

何度も俺を振り返る亜由美を引つ張って由香里先生は病室を出て行った。

「さて、おばさんシヨウくんの着替え持ってくるわね。

遙、あなたも今日は学校休んで良いからちよつとシヨウくんについててあげて」

窓の外を見つめたままだった遙がようやく俺に目を向ける。

「…はい」短く答える遙。よく見ると目が真っ赤だ。

「じゃあ、お願いね。シヨウくん、何か欲しい物有る？」

「いえ、大丈夫です」

「そう、何か有ったら遠慮なく言ってね」

おばさんは病室を出る時、俺にウィンクをして出て行った。

鈍い俺でもこれは解る。おばさんが気を利かせてくれたんだな。よし、チャンスだ！

「遙、話があるんだ」

真っ赤な目をした遙が俺を見る。

「…なに？」

そんなに離れていないで、こっちに来いよ」

遙がひよこひよこことベッドの脇に来て、椅子に座る。

「…なに？」

改めて見るとひどい顔してる。

いつもは艶やかな黒髪はボサボサ、

大きくてくるくると良く動くちよつとブラウンが掛かった瞳は真っ赤に充血し、

適度に焼けている健康的な肌も心なしか荒れているようだ。
ピンク色の少し厚めなアヒル唇もちよつと荒れている。

「なに人の顔じろじろ見てんのよ……」

アヒル口をさらにそれっぽく突き出しながら文句を言う遥。

「ぷっ！」

俺は我慢できずについ噴出してしまった。

かあーつと赤くなる遥。

「な、なに笑ってんのよバカシヨウ！」

大体、亜由美を誤解させるような事言っただけでその気にさせて、
それでこんな事になったんだからほんとに自業自得なんだからね
！」

マシンガンの様にまくし立てる遥。うん、コイツはやっぱこうでな
くちなな。

「ああ、悪かった。でも、俺ってけっこうモテルんだよな」

ニヤニヤしながら言う俺。

「ななな何言ってるのよバカじゃないのあんた！」

たまたまあんたを好きな女の子が三人バツティングしたからって、
あんたがモテルってワケじゃないんだからね！！勘違いしなさん
なっ！！」

目をバツテンにし、顔中を口にしながら叫ぶ遥。

ん？三人？

「三人？えーと、亜由美と、亜里沙と……あと一人は誰でしょう？」

その瞬間、遥の顔が瞬間湯沸し器の様に更にカーッと真っ赤にな
った。

これはマジ見ものだった。人間の顔ってこんなに一瞬で色変化する
ものだったのか。

「わわわわわわわわ………！！！！！」

頭と両手をぶんぶか振り回しながら「わ」を繰り返す遥。

俺は遥の顔をぱっと両手で抑えた。

「……………！！」

自分でもどうして良いのか解らなくなってるらしく口をパクパクさせてキョドる遥。

俺はすうつと深呼吸してから、遥の目を見詰めながらはつきりと言った。

「遥、俺、お前の事好きなんだ。

芳野先輩と付き合ってるって解ってても、

お前が一番、好きなんだ」

「はひょえっ！おうつ！？」

奇声を上げて目を白黒くるくるする遥。

しかし、手をばたばたするのは止めて、顔に生気が戻ってきた。

すーはーすーはーと呼吸をしている遥を見ながら、俺は黙っていた。

しばらくして、すーっと息を吸った遥がきつと俺の目を見つめて怒鳴りだした。

「バ、バカシヨウ！亜由美のことはどうすんのよ！

あの娘、本気であんたに恋してるのよ！」

「それはこれから良く考えるさ。亜由美は今、かなり不安定な状態だから

あんまり無下にするとか解らないしな。

亜里沙は大丈夫。あの子は芯の強い子だから。

それに、別にお前に今すぐ付き合ってくれって言ってる訳じゃない。

お前だって芳野先輩の事が有るだろうし。

ただ、俺の気持ちを前にお前に伝えときたかったんだ。
遥、俺はお前が好きだ。以上！」

遥は真っ赤になって下を向いてしまった。

もしかして、遥も俺のこと好きだと思ったのは俺の勘違いだったのか…？

そんな不安に俺が苛まれた時、ボソッと遥が呟いた。

「…あたしも、ショウの事が好きなんだから…」

…うしっ！！

俺は心の中でガッツポーズをした。

その時、ふんっ！と気合を入れた遥がバツと顔を上げた。

「昨日、博隆とお別れしてきたわ。自分の気持ちに気付いちゃったから、

このままずるずると付き合ってるのはいけないと思ったの。

だから、私、今、フリーなんだから…だから…その…」

俺は遥が何を言っただけなのかわからないのか、正確に理解した。

「遥、俺と付き合ってくれないか？」

俺たちは十秒ほど見詰め合っていた。

「いいよ…」

遥が小さく答えた。

「だけどっ！！絶対浮気なんか許さないし私を一番にしてくれなきゃダメだからねっ！！」

目をバツテンにして叫ぶ遥。

「りょーかい、俺の遥ちゃん」

俺の言葉にまたまた赤くなって黙る遙。

そして、突然立ち上がりドアを開け左右をじっと確認している。

…なにやってるんだ？

よし！と一声上げて俺の隣にドドドと戻ってきて、すんと椅子に座った。

そして、俺に顔を近づけながらふつと目を瞑る。

なるほど…俺は笑って、そつと遙の唇に自分の唇を重ねた。

バーン！！

「お兄ちゃん！大丈夫！？」

「シヨウ兄ちゃん遊びに来たよ」

突然ドアが開きカナサリが元気良く飛び込んできた。

「！！！」

「な！」

驚いた俺は唇を離してカナサリに振り向く。

「…あれ？なんでハル姉そんなに離れてるの？」

香奈が不思議そうに聞く。

え？と思い遙を見ると、いつの間にか窓際に立っている。

一体、どれだけ高速で移動したんだよ…

「べ、別に！！っていうか、ノックぐらいしなさいよね！！」

真っ赤になって怒鳴る遙。

「何騒いでるの遙？もう、あなたたちは来なくていいっていったのに…」

「ごめんねシヨウくん、この子達今日学校は創立記念日で休みなのよ」

おばさんが謝りながら入ってくる。

俺と遥は顔を見合わせ、あははと笑い出した。

予想外？

笑っている俺達を不思議そうに見ているカナサリ。

「あら、仲直りしたのね？良かったわ」

おばさんがニコニコしながら言う。

「で、二人はお付き合いする事になったのかしら？」

ガタン！

遥がずっとけている。

相変わらずリアクション大魔王だなお前も。

「ななななななななな…！！」

真っ赤になりながら口をパクパクさせる遥。

お前：それ思いっきり肯定してるのと一緒にだぞ。

「あら、図星？それは良かったわ！

ね、シヨウくん」

ウインクするおばさん。

「はあ、まあ…」

他になんと答えればイイヤラ…

「ちよつと待つてよ！なにそれ！！」

突然沙里が叫ぶ。

「わっ！いきなり大声出さないでよ〜？」

びっくりした香奈が文句を言う。

「なんで！芳野さんの事はどうするの！？」

沙里がキツと遥を睨みながら叫ぶ。

俺達は呆気を取られていたが、まず我に返ったのはおばさんだった。

「沙里、何を言い出すの？あなたには関係無いでしょう？」

少し強い口調で言うおばさん。

「だって！それじゃ二股じゃない！そんなの不潔よ！」

「沙里！そんな言葉どこで覚えたの！いい加減にしろさい！」
おばさんが本気で怒る。

「この間、ハル姉だってママだって、シヨウ兄ちゃんの事忘れてた
くせに！」

「あ、あたしも忘れてた」
「のほほんと言う香奈。」

「香奈は黙ってて！！」叫ぶ沙里。

「ふえ！！」沙里に怒られて半泣きになる香奈。

「どうしたって言うの、沙里！お姉ちゃんも怒るわよ！」
遥が強い調子で叱る。が、沙里は止まらなかった。

「バカ姉！シヨウ兄ちゃんの事忘れて芳野さんとイチャイチャして
たくせに！」

私はそんなの認めないんだから！シヨウ兄ちゃんの事を一番好き
なのは私だもん！！」
最後は涙声になっていた。

「！何ですって…！」

おばさんが驚いている。

「沙里、あなた…」

遥も絶句してしまった。

「なに？なんなのお？」

半泣きの香奈は意味が解らず戸惑っている。

俺は…

「沙里、あのな…」

「シヨウ兄ちゃんにとっては私は妹みたいなものなのは解ってるも
ん！」

「だけど、昔から私はシヨウ兄ちゃんの事が好きだったんだから！
ハル姉みたいに、シヨウ兄ちゃんの事が好きなのに
他の人と付き合ったりなんてしないもん！！」

はあはあと肩で息をしている沙里。

病室にしばらく静寂が訪れた。

「ハル姉のバカあつ!!」

沙里が叫びざまに病室を飛び出す。

「あつ! 沙里! 待ちなさい!!」

おばさんと香奈が沙里を追って飛び出した。

後に残った俺と遥は気まずい空気に包まれてしまった。

「なあ、遥、沙里の気持ちは気付かなかったのか?」

「...ええ、シヨウの事を好きなのは解ってたけど、まさかあんなに本気なんて思わなかった...」

俯いて答える遥。

「...まあ、単なる憧れみたいなモノだと思うけどな」

「うん...でも、最近の小学生高学年は結構進んでるみたいだから...

私達の頃みたいに、男女でいがみ合ってるなんて事はないし、

カナサリのクラスでも彼氏彼女みたいな付き合いしてる子もいる

らしいし...」

うゝむと唸って黙る俺達。

「まあ、気を揉んでも仕方ないさ。おばさんにフォローしてもらおう」

「...そうね」

遥が頷いた時、誰かがドアをノックした。

「はい、どうぞ」

俺が答えると、「シヨウくん、入るね」と亜由美の声がして、

亜由美を先頭に、まどかさんと俺を殴った男性が現れた。

「ねえ、遥ちゃんのおばさんが泣いている沙里ちゃんを

ロビーで抱っこしてたけど、何か有ったの?」

開口一番、亜由美が不思議そうに聞いてくる。

ほっ、なんとか沙里は保護されたか...

「ああ、ちょっとね。まあ大したことじゃないから気にするなよ」

俺が答える。

「ふうん…あ、パパ！もつとこっちに来て、早くシヨウくん^{ちゃん}に謝つてよ！」

亜由美に怒られて、中年男性が俺の傍にやってきた。

「…あー、…昨晩は、あー、私の勘違いで、あー、済まない事をした。あー…」

…なんか、謝られてる気がしないんですけど…

「パパ！いい加減にして！全然心が籠^{こも}ってないじゃない！」

亜由美が鬼の様な形相で怒る。

と、またもノックが聞えた。

「…どうぞ」

俺の変わりに遥が答えると、ドアを開けて眼つきの鋭い男が二人入ってきた。

「あ、刑事さん…」

遥の親父さんが気まずそうに呟く。

「どうも、南さん。いやね、被害者の少年にちゃんとお詫びなさってるか気になったモノでね」

歳の若い方の刑事が親父さんを見ながら言う。

「あ、キミが被害者のシヨウくん^{ちゃん}か。俺は担当刑事の南雲だ。こちらは上司の近藤。よろしくな」

「あ、はい、こちらこそ」

二人の刑事は親父さんに向き直った。

「で、南さん、ちゃんとお詫びはしたんですか？」

さつき、警察署^{うち}から出た時の感じじゃああんまり納得^{うち}できて無さそうでしたかね？」

黙って俯いている親父さん。

「そりゃまあ、半裸の愛娘を押し倒していた少年にお詫びつてのも辛いでしょうが、

実際の所勘違いなのは解ったんだし、何よりも凶器で大怪我させてるんだからねえ」

若い刑事が親父さんに鋭い目を向けながら肩を叩く。

「シヨウくん、南さんはちゃんとお詫びしてくれたかい？」

突然、近藤と言う年配の刑事が俺に聞いてきた。

正直、まともなお詫びをしてもらっただけと言いたいけど…でも、亜由美の親父さんだし、なんとなく気持ちは解るしな…

「はい、きちんとお詫びしてもらいましたから大丈夫ですよ」俺の言葉に親父さんが驚いた様に顔を上げた。

「…そうかね、なら良いんだが。」

所で、今回の件で南さんを告訴する気が有るかね？

有るのなら然るべき手続きを取らねばならんのだが」

上目遣いに俺を見ながら近藤刑事が聞いてくる。

亜由美と親父さんとまどかさんが息を呑み、はっとしている。

「いいえ、そんな事は考えていませんので無用です」

俺がはつきりと答えると、三人がほっとした様に息を吐いた。

「…そうかね。それでは問題無いな。じゃあ、我々はこれで失礼するが、」

もし何か相談とか有るようなら電話をくれたまえ」

そついうと近藤刑事は俺に名刺を渡し、南雲刑事と共に帰っていった。

婚約うつ！？

病室にしばらく静寂が訪れる。

「あ、そう言えば、俺取り調べっていうか、調書みたいなの取られてないな」

はつと気付き、なんとなく声に出す俺。

「え？だって、昨晚目を覚ました時に来ていたお巡りさんに話してたじゃない？」

「…そうだっけ？全く覚えてないや…まあ、頭打っていたから仕方ないか」

ははは、と笑う俺。

ふう、と溜息を付く遙。

「昨晚、本当に済まない事をしてしまった。

誤解からとは言え、やってはいけない事だった。

申し訳なかった…」

親父さんが深々と頭を下げている。

驚いていた様な顔で親父さんを見詰めていたまどかさんも、はつとしたように頭を深々と下げた。

少し驚いたが、

「ええ、気にしないで下さい。」

と答える俺。

「…ちゃんと謝れるんじゃない」

亜由美も驚いた様に声を出す。

「治療費や通院費なんかの必要経費はもちろんウチで持たせて貰うし、

それに、なるべくキミの希望に沿える様に慰謝料も出させて頂く」

「…治療費と必要経費はありがたく頂きますが、慰謝料は要りませんよ」

俺の言葉に親父さんは頭を振る。

「いや、そういうワケには行かない。

私は正直、キミの事を誤解していた。

亜由美が最近、家庭の事情から夜遊びをする様になってしまったのは

キミとの交際が原因くらい的事を考えたしまったが、それは大変失礼な思い違いだった」

再び深々と頭を下げる親父さん。

「そうよ！シヨウくんは真面目で、優しくて、頑張り屋さんで、力ツコいいんだから！

私の夜遊びの原因は、そこに居るパパの新しい奥さんなのよ！」

亜由美が怒鳴る。

「亜由美ちゃん…」まどかさんが哀しそうに呟く。

「亜由美、なぜそんなにまどかを嫌うんだ。

昔はあんなに懐いていたじゃないか」

親父さんが諭すように言う。

「何言ってるのよ！ママが出て行った途端にウチに入り込んで！

私に優しくしてくれてたのも下心が有ったからなんですよっ！！」

パンっ！！

病室に響いた音は、遙が亜由美を引つ叩いた音だった。

「は…るか…ちゃん…？」

亜由美は頬を押さえながら呆然としている。

亜由美の言葉を聞きながら怒りの形相をしていた遙を見ていた俺は、やるのではないかと予想していたので驚きはしなかったが。

「バカっ！！亜由美のバカっ！！」

遥が涙を流しながら怒っている。

「あなた、昔はパパが大好きって私たちに自慢してたじゃない！それに、娘を心配して夜中に探し回るなんて、そんな良いお父さんとまどかさんに何てこと言っのっ！！」

さて、俺の出番かな。

皆が愕然としている間に俺は痛む左手と右足を庇いながらベッドを下り、

びっこを引きながらドアの近くへ移動する。

遥の勢いに押されて、遥以外は俺の行動に気付いていない。

「何よ…何よっ！！遥ちゃんのバカあつ！！」

遥ちゃん家は良いわよねっ！！優しくてカッコいいおじさんに綺麗なおばさん！

可愛い双子の妹ちゃんまで居てっ！！そんな幸せなあなたに私の辛さなんて解るわけ無いわっ！！」

だつと駆け出す亜由美がドアを開けようとした時、俺は亜由美を右手で抱き止めた。

「痛っ！！ハハ、まだやっぱ痛てえな」

「シヨ、シヨウくん…？」

涙をいっぱいに溜めた瞳で俺を見上げる亜由美。

「亜由美、お前は幸せなんだぜ？お前には優しくて娘想いなお父さんと、

一生懸命お前のお母さんになろうとしてくれるまどかさんが居るじゃないか？

それとも、まどかさんはお前の事を邪魔者扱いでもするのか？

もしそうなら、俺が許さない。遥だって許さない。だって、俺達は幼馴染じゃないか！

昔からずっと一緒に遊んできただろ？悩みが有るなら俺達に話せよ。

俺と遥は全力でお前の為に出来る事をするからさ」

「シヨウくん…ふえ、ふえええん！！」

亜由美は俺に抱きついて泣き出した。

遥が俺にグツとサムアップしている。

俺も亜由美を右手で優しく抱き締めながら、ギプスに包まれた左手を上げてサムアップを返した。

「シヨウくん、遥ちゃん、ありがとう…」

親父さんが深々と頭を下げる。

まどかさんも涙を流しながらそれに倣う。

「亜由美、良い友達と彼氏を持ったね…」

親父さんが涙声で言う。

うんうん、と頷く俺と遥とまどかさん。

…ん…？

ピク、と遥が固まった。

「そうよ、最高の彼氏でしょ、シヨウくんは」

亜由美が涙を拭きながら言う。

ピシ、と俺と遥の間の空気が凍った。

…天国のママン、絶対零度な視線が俺に突き刺さってるよ…

「あ、あの、お父さん、それはデスね、誤か」

「よし！解った！私はシヨウくんと亜由美の交際を認めるぞ！
いや、シヨウくん！ふつつかな娘だが、キミになら任せられる！
いっその事、婚約してしまっただろうだ！そうすれば、シヨウくんは家に住んでもらえるし、
学費や生活費、進学費なんかもウチで面倒を見て上げられる！」
感極まった様に叫ぶ親父さん。

つて、ちよつとちよつとおうつ！！

「ホント！？パパ！きゃあ大好きいっ！！」
親父さんに抱き付く亜由美。
おっさん！デレデレしてんなよっ！！

「ちよ…！！」

遥が何かを言おうとしながら絶句している。
そして俺をキッと睨んで口をパクパクしているが…
ええいっ！！

「お父さん！亜由美！ちよつと待ってくれよっ！！」
「うんうん、もうお父さんと呼んで貰えるのか。嬉しいが寂しい、
複雑な気分だな」

「もう、パパったらあ！」
「そうだな、まあ大学生結婚ていうのも中々ロマンチックだな。私も憧れたしなあ…」

遠い目をする親父さん。おっさん、自分に酔ってるね…？
「ようし！じゃあ、二人が無事に大学受かったら入籍と挙式だな！
費用はお祝いに私が全部持とう！新婚旅行はどこが良い？
あ、私とまどかもついでに旅行に着いて行こうか！」

「私オーストラリアが良いっ！でも、向こうでは別行動だからね」
「ははは、若い二人の邪魔はせんよ。行きと帰り以外は別行動でな」
「そんな事言つて、まどかさんとの邪魔をされたくないんでしょ？」

「やはは、亜由美には適わないなあ」

をい。あんたら。さっきまでの積み木崩しチックな雰囲気はどこに……？

つて言うか、あの、その、お話聞いて下さると嬉しいんですが……

「だーかーらー！なんでそうなるんですか！」

「おお、シヨウくん済まない、君の意見を聞いてなかったな」

……ほっ。我に返ってくれたか。

「で、ドコが良い？オーストラリアじゃ不満なら、ヨーロッパでもカナダでも……」

……をいっ！！親父っ！！そっちかいっ！！

「あなた、亜由美ちゃん、ちょっと待って。シヨウくと遙ちゃんが戸惑ってるわ。」

大体、飛びすぎよ二人とも。もうちょっと落ち着いて」

まどかさんが冷静に突っ込みを入れてくれる。

「あ、ああ。そうだな。ちよつと先走りすぎたか。」

まあでも、シヨウくん、今の話は飛び過ぎとしても婚約の話は考えてくれたまえ」

「……え」と、その、あの」

言い淀む俺。

「とりあえず、今はシヨウくんの怪我の完治が最優先です。」

後の話はそれからじっくりしましょう」

まどかさんが俺と遙に目配せをする。

この人、かなりデキそうな女性だな。

「あらあ？何が有ったの？」

遥のおばさんが眠った沙里を抱いて戻ってきた。

香奈もひよこひよこことくっ付いて来てる。

「あ、これは若宮さん、この度は大変ご迷惑をお掛けしまして…」

亜由美の親父さんがおばさんに挨拶する。

「ね、シヨウくん！明日何か作ってくるね！何が良い？」

亜由美が俺の腰に手を廻して抱きついてくる。

遥からの視線がメチャ痛てえよ…

「あ、ああ。じゃあ肉じゃがなんか良いかな？」

適当に答える俺。

「さ、亜由美、今日は帰ろうか。」

シヨウくん、また来させてもらつよ。さっきの話、考えておいてくれ」

親父さんが俺の肩をポンポンと叩いて病室を出て行き、まどかさんがそれに続く。

「シヨウくん、また明日ね！大好きだよ」

亜由美が突然俺の頬にキスをしながら言い、タタタと掛けて出て行った。

立ち尽くす俺の後ろで、真っ赤に燃えている炎の様な存在感が居る…ギギイツ、っと自分の首から音がしてくるような気さえしながら振り向くと、

可愛い顔を般若の様に歪めた遥が立っていた。

神よ…もし居るのならこの状況をなんとか収拾してくれたまえ…

熱々？

「ショウくん、退院おめでとう！」

「無理しちゃダメよ。まあ、可愛くて世話好きな彼女が居るから大丈夫か！」

にこやかな看護婦さん達に見送られ、俺は一週間の入院生活にピリオドを打った。

「ショウくん、今日はお祝いしようね！まどかさんが用意してくれるの！」

まだちよつと痛い右足を引き摺る俺を支えているのは…

長かった髪をバツサリと肩までの長さに切ってしまった亜由美だ。俺の世話をするのに邪魔だとかで、惜しげもなく切ってしまったそうだ。

その行為に涙を枯らすほど泣き濡れた男共が二ダースは居たとか…

そして、その俺達をぶすくれた顔で追うのは遙ちゃん…

ものすげえ冷たい視線が俺と亜由美に突き刺さっている…

つて、何度目だこの背筋の冷たさは。

くるつと振り返った亜由美が、

「遙ちゃんも絶対来てね！香奈ちゃんと沙里ちゃんもね！」

と遙に笑い掛ける。

「え、ええ、ありがとう！」

無理に微笑みながら答える遙。だが噛んでるぞ…

…すまん、我が恋人よ…

しかし、現在の亜由美の精神状態を考えると、突然

「実は俺、遥とラヴ。してるからお前とはラヴ。出来ないんだ。テヘツ」

なんて言おうモノならどうなっちまうか解らないしなあ…

その事自体は遙自身も理解していて、彼女自身も

「亜由美には私たちの事はしばらく内緒にしようね」と言ってるから問題は無いハズだが、

そういう事情が有ったとしても自分の彼氏が目の前で他の娘とイチヤイチヤしてるのを

ニコニコしながら見てるのは無理だろうな。常識的に考えて…

だが、退院すればバイトで忙しい俺の所へ

亜由美もそうそう遊びに来る訳には行かないし、

亜由美の家から俺の部屋までは結構距離有るしな。

そうしたら、思う存分遙とイチヤ×ラブ出来るってもんさ！ああ！そうだと！

しかし、そんな俺の目論見が外れまくるのはお約束なんじゃないのか…？

いかん、ついマイナス思考に陥る癖が付いちまってる。

ポジティブシンキングで行こうぜ！俺よ。

病院の外に出ると、亜由美の親父さんが車で待っていた。

「やあ、シヨウくん、退院おめでとう！さあ、乗って乗って！」

助手席からまどかさんが降りてきて荷物をトランクに入れてくれる。

「うおっ！BMW…^{ビーム}」

こんな高級車に乗るのは初めてだ。

俺んちで買った一番高価^{たか}かった車は最後に乗ってたハイエースワゴンだったしな。

それまでは軽のハコバン専門だったし。

遙の家もセドリックだし…

亜由美の親父さんは某一流企業重役だからな…

「さ、みんな乗って！とりあえずシヨウくんの部屋に行こうか。

遙ちゃんのご家族は今日のお祝いに来てくれられるんだよね？」

親父さんが遙に聞いてくる。

「あ、はい、父は仕事なので無理ですが、私と妹達はお邪魔します」

「あら、お母さんは？」

まどかさんが聞く。

「あ、母は父の食事の支度とかが有るのでご遠慮させて頂くそうです」

「まあ、残念ね。でも、今日は私と亜由美ちゃんで腕によりを掛けたから期待してね」

「…はい、ありがとうございます」

うゝむ、無理してるな、遙。

後でイイコイコしてあげよう。

そここうする内に俺の部屋へと到着する。

一週間ぶりの我が部屋、なんか物凄く久しぶりな気がするなあ…

亜由美に待っているように言い、カナサリを呼びに行く遙と二人で車を降りる。

「あ、遙！お前に借りてたCD返すからちょっと来てくれよ」

俺は亜由美にも聞こえる様に大声で言い、遙と部屋に入った。

すると、結構散らかっていた部屋の中がすっきりと片付いていて驚いた。

「掃除、しといたから…」遙がぼそつと呟く。

俺は突然振り向き、遙を抱き締めた。

「あん！もうバカ…」

アヒル口で文句を言いながらも俺の首に腕を回す遙。

俺達はぎゅっと抱き締め合った。

遙の胸が俺の胸に押し付けられて柔らかい感触が広がる。

遙が潤んだ瞳で俺を見詰めていたが、すつと瞳を閉じて

可愛いアヒル口を少し突き出した。

俺は自分の唇を遙のそれにそつと重ねた。

「ん…」

遥が軽く喘ぐ。

一度唇を離し、角度を変えて重ねる。

「あん…」

可愛い遥の喘ぎ声に、さっきから大きくなっている俺の一部が更に反応する。

しかし、遥はそつと俺の胸に手を当てて唇を離してしまった。

「あんまり長く掛かると、不自然でしょ…」

潤んだ瞳で俺を見詰める遥。

俺達はもう一度、ちゅつと軽くキスをした。

「シヨウ、大好き…もうどうしていいかわかんない位大好き…」
遥がぎゅゅつと抱きついてくる。

「俺もだよ、遥。もう絶対離さないからな」

言いながらぎゅゅつと抱き締める。

「ずつと、こうしてたいよ…」

遥が涙ぐんでいる。

「今夜、亜由美の家から帰ってきたらちゅつと寄ってけよ」
俺の声に遥が首を振る。

「え？嫌なのか？」

焦る俺。なんか、下心でもある様に見えたのか…？

「んーん、ちゅつとじゃイヤ。ゆっくりしてくもん」

遥が悪戯っぽく笑う。

泣いたり笑ったり忙しい娘だな、お前も。

そして、俺達はせーの、と声を掛けてバツと離れた。
適当なCDを遥に渡して、

「じゃあ、カナサリ呼んで来いよ」と声を掛ける。

「ん、ちゅつと行ってくるね！」

元気に声を上げて遥が部屋を飛び出していく。

…今夜か。うーん理性が持つかな…

告白…

さて、まどかさんと亜由美の料理はとても美味しく、
懸念していた遥の機嫌と沙里の状態もまあ問題無かった。

で、現在^{いま}。

俺の目の前で裸の胸を隠して泣きながら真っ赤になっている遥がい
る…

もちろん！

それ自体は怪我はすれども健全な男子高校生として、
幼馴染にして最愛の彼女が自分の目の前であられもない姿をさらし
ている事は

歓迎こそすれ嫌がる理由なぞどこにも無い。

ただし、そこに血を吐く様な告白を伴ってしまっているのでは…

「ぐすつ、ねえ、ショウ…私みたいな女の子、嫌いになった…？」

遥が泣きながら擦れた声で叫ぶ。

「そ、そんな事ないさ！どんな事しても、遥は遥だよ。
嫌いになんてなるわけ無いじゃないか！」

「嘘っ！！じゃあなんで、抱きしめてくれないのっ！！」

くっ…！

俺がもう少し早く自分の気持ちに気付いていれば！

くそっ！動け！俺の体！俺の腕！

俺の一番大切な人を抱きしめろ！

「うおらあっ！！」

俺は叫び様、遥をぎゅうつと抱き締めた。

「！！シヨウ…」

俺の腕の中の遥が呟く。

「大丈夫だよ、俺はぜんぜん気にしてない。

お前はその時、確かに芳野先輩の事を好きだったんだろ？

だったら、そういう事が有っても当然だよ。

これから、俺たちはずっと仲良くやってくんだろ。

何も、問題なんかないさ」

「シヨウ…ありがとう…」

遥が俺をぎゅつと抱き締める。

これから俺が、遥を守って行かなきゃな…

「ね、シヨウ…」

遥が目を瞑り、口を少し突き出す。

俺はそつと唇を重ねた。

俺の脳裏には、今夜の出来事が甦って来た…

「遠慮せずに食べてね！」

ジューズで乾杯した後、亜由美とまどかさんの料理を頂く俺たち。

豪華で本格的な料理はヘタなレストランなぞ足元にも及ばないほど美味く、

俺も遥もカナサリも夢中になって食べてしまった。

食後、みんなでゲームなどして楽しい時間を過ごす。

午後九時を廻り、カナサリが眠くなってきてそろそろ帰らなきゃという時の事だ。

うとうとしているカナサリをソファに寝かし、俺と遥と亜由美の三人になった時、

「ねえ、遥ちゃん、芳野先輩とはどこまで行ってるの？」

無邪気な亜由美の質問に遥の動きが止まった。

「え！…そんな、別に何もしてないよ…」

遥の動揺ぶりが、何もしてないなんて事がない事を雄弁に語る。

「またまた！だって校内NO・1カップルの名は伊達じゃないですよ？」

ちよつと前、体育準備室でキスしてたつて噂になったじゃない！
その噂は俺も知っている。

ただ、本人たちが否定も肯定もせずに騒がなかったので沈静化した
が。

「あ、あれは！…！」

絶句している遥。あれは、本当だつたんだな…
チラチラと俺を見る遥。

「ねーねー、教えてよー！遥ちゃんの体験を聞けば、
オクテなシヨウくんでも少しは刺激になると思うし！きゃはっ！
赤くなつた顔を両手で押さえ、ふるふると振る亜由美。

「そろそろ、カナサリを寝かさなきゃダメだな。帰ろつか、遥
俺が立ち上がる。」

「あん、もう少し良いじゃない！」

亜由美が不満げに口を尖らす。

「俺達は良くて、遥のおじさんとおばさんが心配するだろ？」

また、近い内にみんなでゆつくり遊ぼうぜ。

俺も病み上がりだから無理出来ないしな」

「…そうね、じゃあ、パパ呼んで来る」

亜由美がパタパタと掛けて行く。

俺は、俯いたままの遥に声を掛けた。

「まあ、気にするなよ。俺はそんなの気にしてないし」

「…ホント？」

遥が顔を上げる。

あ！涙ぐんでるじゃないか…！

「あ、ああ！ホントさ。そりゃ全く気にならないって言えば嘘にな

るけどな」

「…やっぱ、気になるんじゃない…」

また俯いてしまう遥。くそっ！どうすりゃ良いんだよ…

その後、俺達は亜由美とまどかさんに見送られながら親父さんの車で遥の家まで送ってもらった。

俺と遥で寝てしまったカナサリを抱いて遥の家に入る。

カナサリをベッドに寝かせて俺が帰ろうとすると、

遥が一緒に行くと言い出した。

もう遅いから、という俺におばさんが

「良ければ連れてって上げて。今日はショウウくんのトコ泊まって来なさいな」

と、とんでも無い事を言う。

俺が焦っている、「…ありがと、ママ」と遥が答える。

俺がおばさんの顔を見ると、少し寂しげな表情でウインクをしてくれた。

二人で夜道を歩いていると、遥が俺の手に腕を廻して来る。

俺は遥の手を握り、ぴったりとくっつく様に寄り添った。

部屋に入り電気を付ける。

「ねえ、お風呂借りても良い…？」

遥が言い出す。着替えはおばさんが持たせている。

「あ、ああ。今焚くから」

俺のアパートにはシャワーなんて言う洒落た物は付いていないのでガスを焚きつけて沸かさなければならぬ。

ガスを焚き付けて、部屋に戻ったら遥が涙をぼろぼろと零していた。

「遥…」

俺が声を掛けるとビクツと遥が震える。

少しの間、風呂を焚くガスの音だけが響いていた。

「ねえ、シヨウ…私ね、博隆と付き合ってる時に…」

そこまで言っていると遥は声を上げて泣き出した。

「えっ、えっ、えっ…ふえ、え〜ん…」

何だ！どうしたんだよ遥！

声を掛けて抱き締めたいのに、俺は動く事が出来ない。

「わた、私は、えっ、ダメ、って、ふえっ、言っただけど、ひくっ…」

遥は顔中ぐしゃぐしゃにしながら告白を始めた。

愛してる！！

遥は泣きじゃくりながら告白を続けた。

「わたし、私、ひつく、まだ、早い、うえ、って、思っ、ひつく…」

先月末の事。

遥と芳野先輩はある映画のレイトショーを見に行った。

もちろん、両方の親の許可は取って、だ。

しかし、芳野先輩の勘違いでその日は観たい映画の公開一日前で、観たくもない映画をお金出して見るのも何なので映画鑑賞は取り止めに。

これからどうしようか相談しながら公園を歩いている内に良い雰囲気となり、

ベンチに座ってキスしたりイチャイチャしているとチンピラっぽい五人組に絡まれ、

芳野先輩と遥で一人ずつぶっ飛ばしてその隙に逃げ出した。

追いかけてくるチンピラから逃げている内に、ラブホ街に迷い込み、隠れるのと一休みする為に一軒のラブホに入ってしまったと。

そして、その後の事は…

「うえっ、ごめんね、ごめんねショウ、ひつく、あたし、ひつく、

博隆に、えっ、ふえ、えーーーーーん！！」

遥がペタンと床に座り込み、顔も隠さず大声を上げて泣き出した。

その時の俺は呆然としてしまい、泣きじゃくる遥をほけつと見ていた。

キスくらいは当然だと思っていた。

もしかすると、遥の魅力的な体は触れられているかもしれないとも思った。

しかし、まさか…！

その時、風呂のタイマーが力チッと止まった。

「遙、風呂沸いたぞ…」

なぜか俺の口からそんな言葉が出てしまった。

ピクッと震える遙

「ねえ、ひつく、ショウ、…ひつく、こんなあたし、ひつく嫌いになっただけ？」

そんな事ない！遙はおまえだ！関係ないよ！

口をパクパクさせる俺。

しかし、肝心の言葉が出てこねえよっ！！

くそっ！！どうした俺！！

今こそ、俺の今までの生涯で一番大切な娘を抱き絞めろ！！

…しかし、俺の腕も、足も、口も…！！

なんで動かないんだ！どうしちゃったんだよ俺！！

お前はその程度の男か！！

大好きな娘がばつくりと割れた傷を隠さずに見せてくれたのに、その傷に怯んで動けなくなっちゃまう程度の小せえクズなのか！！

「やっぱり、ひつく、許してくれないんだね…ふえ、うえっん！
また泣きじゃくり始める遙。

ちくしょう！どうして動けないんだ！何で声が出ないんだ！！

ドン！ガシャーーン！！

「うわっ！！！」

「きゃっ!？」

突然、隣の物置部屋から凄いい物音がして俺と遙は飛び上がるほど驚いた。

「な、なんだ!？誰か居るのか!？遙、お前はここにいろ!」

俺は叫ぶと隣の部屋に向かってダッシュする。

物置のドアを開け、電気を付けると…!

「あっ…!!」

銀色の巨体が斜めになり、積んであった荷物を薙ぎ倒している。そこには、スタンドが外れて倒れかけた親父の形見カタナが有った。

「親父…」

カタナのヘッドライトが俺を睨んでいる様に見える。

俺はカタナを起こし、スタンドを掛ける。

その時、親父の怒鳴り声が聴こえた気がした。

「シヨウ!男の仕事はな、大好きな女の子を護る事だ!お前は遙が好きなんだろ?

だったら、どんな事が有っても遙を護れ!解ったな!!」

小学生の頃、親父が俺に言った言葉。

今こそ、その時だ!

ありがとう、親父!

俺はカタナに向かってバツと頭を下げ、部屋に戻った。

「遙!」

俺が部屋に駆け込むと、遙が上半身裸で立っている。

「わっ!？どうした!遙!？」

思ったよりもずっと大きな遙の胸に目を引き付けられて戸惑う俺。

「…シヨウよりも先に、触られたの！シヨウよりも先に…！」
遥が胸を両手で覆い隠す。

「ねえ、シヨウ！私を抱き締めて！もし、もう汚れちゃってる私で良ければ…」

抱き締めて！お願い！シヨウ！！」

溢れ出る涙を隠そうともせずに遥が叫ぶ。

そっだ、あの涙を止めなきゃ！

動け！俺の体！俺の腕！！

親父に叱られたばかりじゃないか！！
カタナ

「うおらあつ！！」

俺は叫び様、遥をぎゅうつと抱き締めた。

「！！シヨウ…」

俺の腕の中の遥が呟く。

「大丈夫だよ、俺はぜんぜん気にしてない。

お前はその時、確かに芳野先輩の事を好きだったんだろ？

だったら、そういう事が有っても当然だよ。

これから、俺たちはずっと仲良くやってくんだろ。

何も、問題なんかないさ」

「シヨウ…ありがとう…」

遥が俺をぎゅつと抱き締める。

これから俺が、遥を守って行かなきゃな…

「ね、シヨウ…」

遥が目を瞑り、口を少し突き出す。

俺はそつと唇を重ねた。

「ん……」

愛らしい喘ぎ声を上げながら、遥は俺の腰に廻し手にきゅうつと力を込めた。

俺は遥の柔らかい唇の感触を惜しみながらキスを終らせ、もう一度遥をぎゅつと抱き締める。

「遥、お前は汚れてなんかないよ。こんなに綺麗じゃないか。」

俺はお前が大好きだ、愛してるんだ。

だから、もう二度とそんな悲しい顔をしないでくれ」

遥はぐずぐずと泣いていたが、その涙はもう悲しみの涙じゃ無くなっている。

「シヨウ…私ね、ホントは昔、シヨウのお嫁さんになるのが夢だったの。」

でも、成長する内に、いつの間にか忘れちゃってた…

でも、でも、またその夢が戻ってきたよう…」

涙で光る瞳を上目遣いにして、じっと俺を見詰める、俺の最愛の少女。

「…っ、お、お嫁さん!？」

「……ああ、いいだろ！俺だって、昔は遥をお嫁さんにするって思ってたんだしな。」

よし、それなら！

「じゃあ遥、今すぐ、じゃないけど、将来俺がお前を養えるようになったら結婚してくれるか？」

バツと遥が顔を上げ、大きくてくるくる動く瞳が驚いた様に俺を見つめている。

そしてアヒル口がにゅん、と丸まり、にぱっ！としたいいつもの笑顔が戻ってきた。

「……仕方ないわね！シヨウがそんなにあたしの事が大好きなら、

大サービスでお嫁さんになってあげるわよ!!」

……ハア？

「つてをい!!お前なあ!!なんだそりや!!」

「バカシヨウ!あたしに感謝しなさいよね!

あたし以外に本気であんたを好きになる子なんていないんだから
!!」

両腕を腰にあて、ふん!とふんぞり返りながら偉そうに言い放つ遥。
俺はふう、と肩を落としながら溜息をついた。

ま、この方がコイツらしいぜ。あはは、ははは!!

「シヨウ、何笑ってんのよ!さ、お風呂入るわよ!支度しなさいよ
え?

「一緒に、入るのか?」

思わず聞いた俺の言葉に遥はちょっと赤くなつたが、

「そ、そうよ!すっかり私を洗つてよね!今夜は、その、

……シヨウと私の、初めての夜なんだから!」
とぷいっと目を逸らしながら頬を紅潮させた。

そうか、そうだよな。

「ようし、じゃあ気合入れて入ろうか!俺の可愛い遥ちゃん」

「もう、バカ!さっさとしなさいよ!

……私の、世界で一番大好きで大切なシヨウ……」

さて、そんなこんなで一段落。
まだまだ頭痛のタネは多いけど、なんとかかんとかやって行こうか
ね。

そう、俺と遥の二人でな。

さあ、明日も頑張るぞ!!

それすらもただ平穏なる日々

完

愛してる！！（後書き）

Ending image song : 硝子のキッス

Artist : Rika Himenogi

Special thanks to Naoki.M & Haruka.I & Sanae.O
And Very Thanks To All.

Presented by Shogo Hazawa

「それすらもただ平穏なる日々」

ご愛読頂きましてありがとうございます！

まだまだショウと遥のドタバタカップルの物語は続きますが、一先ず区切りとさせて頂きます。

長らくのご愛読、真にありがとうございます！

また、多くの評価と感想を頂きまして、こちらも本当にありがとうございます！

また、現在続編「それすらもまた、平穏なる日々」を連載しております。

こちらも併せてお読み頂ければ幸いです。

それでは、またお会いできる事を楽しみに…

作者より、全ての読者様に親愛の情と感謝の念を込めて…

2007/10/12 羽沢 将吾

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7165c/>

それすらもただ平穏なる日々

2010年10月10日22時23分発行